

親潮

第 301 号
平成 25 年度 第 1 号

OYASHIO

北水同窓会 <http://hokusui.fish.hokudai.ac.jp>

北水同窓会誌

2013

301

No.1



特集 北水の今

海棲哺乳類が見た海を読み解く

- 会員の受賞
- 退職者挨拶
- 総会報告
- 寄稿
- クラス会報告
- ほか

今年度会費納入の方に

北水同窓会限定
クリアファイル
をプレゼント

(会員名簿とともに送ります。)

親潮

第301号
平成25年度 第1号
OYASHIO

CONTENTS

北海道大学ホームカミングデー 2013のご案内	3
北海道大学ホームカミングデー 2013 水産学部卒業生のつどい in 函館	4
幹事長ごあいさつ	5
特集 北水の今	
海棲哺乳類が見た海を読み解く	6
<small>三谷 麗子(特別会員)</small>	
会員の受賞	8
<small>原 彰彦氏(昭46ソ) / 山崎 浩司准教授(平2食)</small>	
退職教員あいさつ	9
<small>吉水 守(昭47食) / 鼎山 雅秀(昭48ソ) / 山口 秀一(昭49干)</small>	
追悼	10
<small>上野 元一氏(昭16後干) / 安住 幸彦氏(昭24工) / 鈴木 翼氏(特別会員)</small>	
第93回定期総会報告	12
寄稿	21
<small>前田 辰昭(昭26工) / 木村 暢夫(昭55干)</small>	
支部会・クラス会報告	25
<small>安間 元(昭38工) / 高橋 豊美(昭44工) / 吉田 康祐(昭44化) / 三橋 正孝(昭53干) / 平山 聡(昭54干)</small>	
書評	28
学位取得と論文題目	28
卒業生の就職先	29
会員異動	29
会員死亡通知	30
親潮投稿規定・編集後記	30

お知らせ

第94回(2014年)北水同窓会 定期総会 開催案内(予告)

来年の北水同窓会定期総会は
函館にて8月上旬に開催の予定です。
会員の皆様には是非ご出席下さいますよう
お願い申し上げます。
詳細は追ってお知らせ致します。



【予定会場】函館市国際水産・海洋総合研究センター
函館市弁天町 20-5

問合せ先

●北水同窓会函館支部 支部長 志賀直信(昭44ソ) / E-mail: shiga@hakodate-jc.ac.jp
または ●北水同窓会事務局 / E-mail: hokusui@hotmail.or.jp Tel: 0138-42-3681



北海道大学 ホームカミングデー 2013



—おかえりなさい「エルムの森」のキャンパスへ!—

日時: 平成25年9月28日(土)

会場: 北海道大学札幌キャンパス・クラーク会館

この催しは、北海道大学を卒業された同窓生の方々が、学部・学科や地域そして年代の枠を超えて母校に集い親睦を深めることで、同窓生相互の発展と連帯強化につなげようというものです。当日、次のような大学主催の催しが計画されております。

- 9:50 ————— 交響楽団による演奏
- 10:00 ————— 歓迎式典
 - ・ご挨拶 北大の近況についてご報告 北海道大学総長 山口 佳三
 - ・ご挨拶 北海道大学連合同窓会会長 数土 文夫
- 10:35 ————— 記念講演会・鳥インフルエンザ研究で著名な喜田 宏北海道大学名誉教授による記念講演を行います。
- 11:20 ————— 応援団による歓迎のステージ
「都ぞ弥生」斉唱～フィナーレ
部局・同窓会主催プログラムの詳細は北海道大学ホームページをご覧ください。

同日、水産学部では、「水産学部卒業生のつどい」と題し、学部と北水同窓会の共催で、百年記念館大会議室において以下の行事を予定しております。

- 14:00—17:00 水産科学研究院 教育・研究ポスター展
- 16:00—16:45 寄席: 原 正氏(昭和51年水産化学科卒)
(高座名 笑生十八番(しょうせい おはこ))
- 17:00—18:30 懇親会(百年記念館ニコラスハウス、会費2,500円)



北海道大学 ホームカミングデー 2013

水産学部卒業生のつどい in 函館 日時：平成25年10月19日(土) 場所：水産学部講堂、各研究室

特に函館に思い出の深い同窓生のために、初秋の一日、特別に函館水産学部キャンパスで学部と北水同窓会の共催による「水産学部卒業生のつどい」を開催します。多くのOB、OGの方のご参加を期待しています。

- 13:00—15:00 研究室訪問
- 15:00—16:00 講演会(講堂)
大塚ホールディングス(株)
代表取締役社長兼CEO
樋口 達夫氏
(昭和50年水産食品学科卒)
来賓 三上 隆 北海道大学副学長
- 18:00—19:30 懇親会 会費4,000円
函館ビヤホール(末広町 TEL0138-27-1010)

樋口 達夫氏 略歴

1977年3月	北海道大学大学院修士課程修了(水産学/食品化学専攻)
1977年4月	大塚製薬株式会社入社 大塚商品研究所配属
1993年1月	札幌支店 支店長
1995年6月	ファーマバイト社(米国)最高経営責任者(CEO)
2000年6月	大塚製薬株式会社 取締役社長に就任
2008年7月	大塚ホールディングス株式会社 代表取締役社長兼CEO就任 現在に至る



同窓生お誘い合わせのうえ、是非ご参加下さい。

参加のお申込みは本誌に同封のパンフレットをご参照下さい。

メールマガジンの 会員登録のお願い

不定期配信ですが、北水や同窓会に関する記事がメールで送られてきます。ホームページから簡単に登録できますので、みなさん、是非登録して下さい。

北大OBが生涯使えるメールアドレス @Frontier(アットフロンティア)のお知らせ

北大では、卒業生向けのインターネットサービスをスタートしました。詳しくは「@Frontier(アットフロンティア)」(リンク<https://mobile.frontier.hokudai.ac.jp/>)をクリックしてください。



幹事長ごあいさつ

北水同窓会幹事長
齊藤 誠一(昭50キ)

高橋是太郎前幹事長および平石智徳前副幹事長より、平成25・26年度の幹事長を仰せつかり、平成24年度総会での承認を経て、本年度より北水同窓会幹事長に就任致しました昭和50年度漁業学科卒の齊藤誠一です。現在は母校北海道大学大学院水産科学研究院にて教鞭をとっております。北水同窓会の皆様におかれましては、ご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

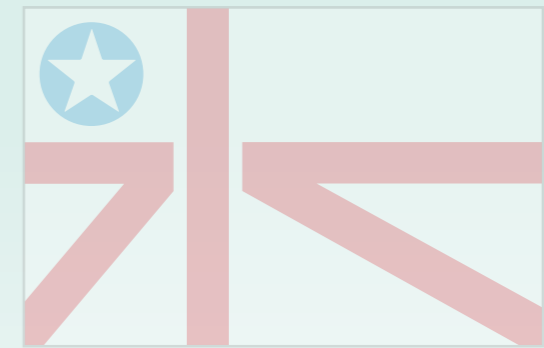
幹事長就任にあたり、私はアベノミクスの3本の矢ではありませんが、北水同窓会発展のための次の3つの柱を提案したいと思います。

1. 財政健全化(成長戦略)
2. 同窓会ネットワークの強靱化(最大活用)
3. 学部への支援・貢献(函館キャンパスの充実化への対応)

現在、北水同窓会の会員数は約11,000名ですがそのうち会費納入者は約1,900～2,000名と2割にも満たない状況です。この会費納入率アップなしには私が目指す財政の健全化は達成できません。解決策のひとつとして、これまで郵便振込と銀行引き落としのみの納付方法を今年度からは順次コンビニ支払い並びにインターネット支払いもできるように図ります。納付方法の簡便化がもたらす増収により財政健全化が達成されれば、その資金は学部支援に活用したいと思います。しかし、一方で何らかのインセンティブがなければ納入方法の変更だけでは納入率アップの実現は難しいことも予測できます。

そこで、会費を納めて頂く同窓生の方々にとって利活用できるネットワークの強靱化を図ろうと思います。昨年より北海道大学全体で始まりましたホームカミングデーはそのひとつの活動です。本年は9月28日(土)に札幌キャンパスで、10月19日に函館キャンパスでホームカミングデーを開催します。1年に1回ですが来年度以降も継続してまいりますので、札幌、函館いずれかでも是非この機会にキャンパスを訪れて頂ければ幸いです。さらにはこの機会をご利用頂き、同期会の開催など同窓生の親睦を温めてはいかがでしょうか。その他、年2回の親潮発行と2年に1回の名簿発行も、これまでどおりでネットワークの強靱化にどのくらい効果があるのか、検討したいと思います。さらに、ホームページの充実やSNS活用による若い世代の同窓会ネットワークへの対応の必要性も認識しております。本年度より、「活躍する北水同窓生シリーズ」として、現役の学部生、院生向けのセミナー開催を始め本学へ訪問または研究打ち合わせに見える予定のOGOBへのメッセージを頂いております。この一環として、10月19日の函館キャンパスでのホームカミングデーでは、大塚ホールディングス社長の樋口達夫氏(昭50食)に在校生向けの講演をお願いしているところです。我こそはというOGOBの方がいらっしゃいましたら、是非ともメッセージや講演等のご協力を賜りたく、宜しくお願い致します。

さらに、支部活動の見える化も目指したいと思います。現在一



部の支部のホームページは北水同窓会HPにリンクされていますが、より多くの支部のリンクを増やしていきたいと思っております。また、支部大会などの様子を北水同窓会のホームページに掲載して参りますので、支部大会開催等のイベントが決定いたしましたら、是非北水同窓会本部へご連絡ください。若い会員の支部行事への参加促進をお願いしたいと思っておりますが、そのためには魅力ある支部活動とはどのようなものかを考える必要があります。20年ぐらい前なら職場の上司からの支部行事への強制参加もあったかもしれませんが、今や若い会員は職場より個人を優先する傾向がありますので、同窓会の役割等についても再考し、そのうえで同窓会ネットワークの価値を示して行きたいと考えております。

同窓会ネットワークの国際化も進んでいます。昨年は北水同窓会韓国支部ができ、これに続く海外における支部の拡大と留学生並びに日本人卒業生による海外ネットワークの強化を学部の国際交流委員会と連携して進めていきたいと思っております。北水同窓生は、他学部に比べ海外で活躍するOGOBの数が多く、先月仕事で訪問したフィジーでも、現地のJICA事務所で活躍する若いOBに出会いました。北海道大学は本年度より「新渡戸カレッジ」という国際的にリーダーシップをとれる人材育成プログラムを開始し、一期生135名のうちに水産学部生も4名選抜され、過去現在を問わず国際的に活躍される同窓生の支援も期待される所です。

学部への支援・貢献をお願いするにあたり、まずは今年度、来年度の学部の動きを紹介したいと思います。昭和45年に建設しました講義棟、研究棟も老朽化と耐震不足をおきながら改修が必要になり両棟の改修工事が平成25年7月から平成27年3月まで約1年9ヶ月に渡り実施されます。また、昭和58年(1983年)に建造されたおしよ丸4世も老朽化が進み、新船建造を文科省に申請していましたが、3年間の折衝の末にようやく認められ、目下建造中のおしよ丸5世は4世よりも約200トン、長さ約6メートルさらに大きな練習船になる予定で、来年度には就航予定です。

研究環境としては、平成26年3月末に産学官の活動の拠点となる函館国際水産・海洋総合研究センター(函館市建設運営)がドック跡地に完成し、同年6月より供用が開始予定です。ここには、産学官の研究機関が入居する予定で、北海道大学からは北方生物圏フィールド科学センターの関係部門並びに水産科学研究院が、他からは公立はこだて未来大学、北海道立総合研究機構水産研究本部函館水産試験場らも入居候補になっています。また、民間企業向けにも8室の入居募集が開始されています。

このように今年度、来年度は北大水産学部にとりまして、これまでにない大きな変化を迎える時期といえます。ホームカミングデーなど大学と同窓会が協働して推し進める行事ばかりでなく、同窓会独自の在学生への支援計画なども立案し、学部発展のために同窓会が少しでもお役に立てるように努力して参る所存です。

最後に、同窓生皆様のご健康とご活躍に加え、皆様のご支援の基に、北水同窓会の発展を祈念しつつご挨拶とさせていただきます。

海棲哺乳類が見た海を読み解く

三谷 曜子 (特別会員)

■Marine (海)+Mammal (哺乳類)

海棲哺乳類とは哺乳類のうち、海を生活の場とする哺乳類の総称です。生まれてからずっと水の中で過ごす鯨類(イルカ、クジラ)や海牛類(ジュゴン、マナティー)から、生まれるのは陸、餌を捕るのが水の中といった水陸両棲の鰭脚類(アザラシ、オットセイ、トド)、そして繁殖期以外でも上陸するラッコや、ほとんど水中にはいないホッキョクグマも含まれます。いちばん近縁な陸棲哺乳類は、鯨類がカバ、海牛類がゾウ、鰭脚類がイタチと分類群の異なる動物たちですが、陸から海に生活の場を移して適応していくために、体を流線型にするなどの共通した特徴が見られます。

ホッキョクグマは水の中ではなく、海水上や陸で餌を探しますが、そのほかの海棲哺乳類はすべて、水の中で餌を探します。彼らは私たちと同じく肺呼吸をしていますので、息が続く時間内で、いかに効率よく餌を探して食べるのかは、とても重要な問題です。しかし、広大な海の中を自由に動き回れる彼らを、人間が追いながら観察することは困難です。そこで編み出された方法が「バイオリギング」です。

■Bio (生物)+Logging (記録する)

バイオリギングは、生き物にデータロガーと呼ばれる記録計を着けて、その行動や周りの環境についての情報を得る手法のことを示します。バイオ(Bio、生物)とロギング(Logging、記録を取る)を組み合わせた言葉で、つい最近に用いられるようになった言葉ですが、その始まりは今から40年以上も前にさかのぼります。最初は、南極の海水の上でのんびりと子育てしているウェッデルアザラシ(写真1)が対象でした。

ウェッデルアザラシは最も南に生息するアザラシで、南極の定着氷と呼ばれる岸近くの厚い氷の上で子を産みます。母親アザラシはしばらく子と一緒にいて、氷上で授乳したりしているのですが、しばらくすると氷の下の海へと餌を食べに行ってしまう。その間、子は氷の上で母親を待ちながら寝ています。餌を食べた母親は、また子の所に戻ってきて、授乳をします。つまり、母親に記録計を着けて、子がいる場所で待っていれば、必ずまた戻ってきて、記録計を回収できるのです。このウェッデルアザラシの習性を生かして、1960年代からバイオリギング研究が行われてきました。それから時代はアナログからデジタルへ、データロガーも多彩なセンサーを搭載できるようになりました。私が南極に行ったのは博士課程1年の時、2000年でした。授乳中のウェッデルアザラシの母親に、3次元での行動を明らかにするための加速度・地磁気データロガーと、餌



写真1. ウェッデルアザラシの親子

などの周辺環境を知るための画像データロガーを着け、繁殖期間中に母アザラシがどの場所に行き、何を見て帰ってくるのかを明らかにしました。すると、アザラシは岸辺に開いた氷の穴から、海底伝いに深く潜って行きますが、餌の群れに遭遇すると、それより遠くまでは泳いで行かず、その場所で餌を食べ、戻ってくる、という行動をしていることがわかりました。また、母アザラシは深く潜って餌を食べる時間のほかに、浅い潜水を行っており、その際には子と一緒に泳いでいることもわかりました。このように、南極海の氷の下という、我々の眼には届かない場所であっても、データロガーが記録したデータを読み解くことで、アザラシがその場所でのどのように行動し、何を見てきたのかを読み解くことができるのです。

■Bio (生物)+Tele (遠隔)+Metry (計測)

さて、学生からポストドクター時代まで、南極やカリフォルニア、ロシアなどの鰭脚類の繁殖地へと赴き、バイオリギング研究をしてきた私が、2008年、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターに着任することになりました。北海道は、日本国内でも最も鰭脚類が見られる場所であり、私にとっては願ってもないフィールドです。しかし、ここで難関が立ちはだかりました。バイオリギング手法は、様々なパラメータを詳細に計測できるという利点がありますが、基本的には回収しなければならない、という制約もあります。ですので、鰭脚類のバイオリギング研究は繁殖地で装着・回収するのが基本となっています。しかし、北海道で見られる鰭脚類のうちゼニガタアザラシを除くすべての種はロシア海域やオホーツク海の流水上で繁殖し

ています。また、国内で唯一繁殖しているゼニガタアザラシも、岩場に生息し、繊細でなかなか捕獲できません。そこで、電波や音波で計測したデータを送信するというバイオテレメトリー手法を組み合わせる研究をすることにしました。現在、我々のチームはトドやゴマフアザラシに衛星発信器を装着して研究を進めています。衛星発信器は個体が海面に浮上すると、電波を発信します。そうすると、上空を飛んでいる衛星がその電波を受信し、個体の位置を計算して、テキストデータにして地上へと送ってくれます(図1)。近年では、位置情報だけではなく、搭載されたセンサーが記録したデータ(水温、潜水深度、塩分濃度など)を圧縮した形で送信する機能がついた衛星発信器もあります。このような衛星発信器を装着することにより、装着した個体がいる場所や、その周辺の環境をほぼリアルタイムで知ることができるのです。

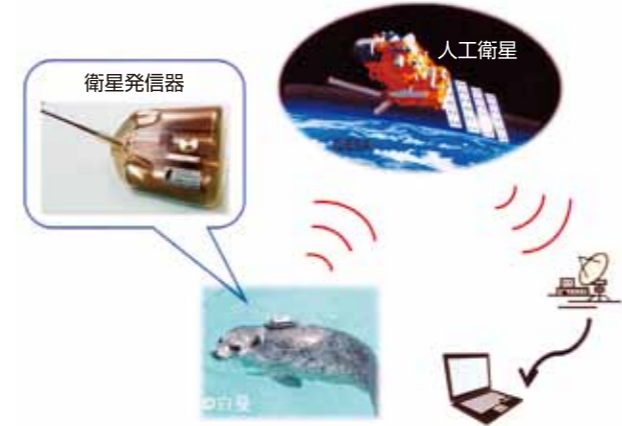


図1. アルゴスシステムによる海棲哺乳類の追跡

■Remote (遠隔)+Sensing (探査)

海の環境は様々な時空間スケールで変動しており、その海で暮らす海棲哺乳類も周辺の環境変化にあわせて行動や生態を様々なレベルで変化させていきます。これまで、海の変化をリアルタイムで追うために、地球観測衛星から海面付近の環境を広範囲にモニタリングすることが行われてきました。しかし、海は鉛直的にも広がる三次元の世界であり、海面下ではどのような変化が起きているのかを広範囲で網羅的に観測することは難しいのが現実です。しかし、海棲哺乳類をプラットフォームとして多様なセンサーを搭載した記録計や発信器を装着することにより、個体自身が経験する海の環境を記録してくれます。また、海棲哺乳類は海の中で餌や生息場所など、その時々に必要な資源を求めて移動することから、個体自身がバイオセンサーになって海の中を探索してくれているとも考えられます。

現在、私たちは紋別市のオホーツクとっかりセンターに保護されたゴマフアザラシの幼獣に衛星発信器を装着し、放獣するという研究を行っています(図2)。この研究は、保護されたゴマフアザラシが放獣後も生き残れるのかを明らかにする、といった、保護活動の一環の意味もありますが、生き残れたアザラシが、どのように海洋環境を選択するかということも大変興味深い課題です。今後も、海棲哺乳類が見ている海を、データから読み解いていくことができればと考えています。

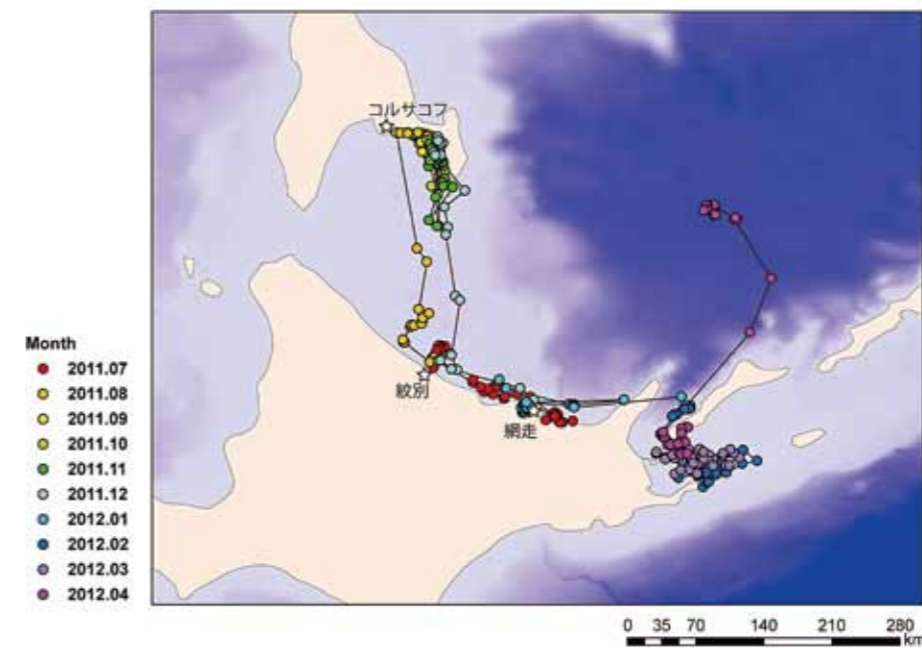


図2. ゴマフアザラシ幼獣(L-131)の放獣後の回遊経路。2011年7月から2012年4月まで追跡することができた。

会員の受賞

CONGRATULATIONS ON WINNING

原 彰彦氏(昭46ソ)
平成24年函館市文化賞受賞および
平成24年度日本水産学会賞受賞
 平松尚志(平5ソ)

原 彰彦氏(昭46ソ)は、魚類血清タンパク質とその応用研究成果に基づく国内外での活躍に加え、函館マリンバイオクラスター事業や人材育成事業の推進により、最新の科学技術を函館の産業に生かし、地域の発展や振興に貢献したことが評価され、平成24年函館市文化賞(自然科学)を受賞されました。また「魚類の卵形成タンパク質に関する免疫生化学的研究」に関する一連の研究が評価され、平成24年度日本水産学会賞を受賞されました。



同氏は、これまで一貫して魚類の血清タンパク質に関する研究を行ってきました。多様な魚類の血液中に存在するタンパク質について、各種電気泳動法・カラムクロマトグラフィー法・抗原抗体反応等を用いて解析を行ったバイオ的な研究者として国内外に知られ、これまで生理学的に重要な種々の血清タンパク質を分離・同定することに成功しました。その中でも特に雌親魚の血液中に出現するタンパク質に注目し、同タンパク質が卵黄タンパク質の前駆体(ピテロジェニン)であることを免疫生化学的に証明しました。また、同様に卵膜の前駆体であるコロオジェニンを雌親魚の血液中から分離・同定し、コロオジェニンと卵膜の関係を明らかにしました。

以降、同氏の研究は魚類卵形成機構の解明に深化され、これら前駆体が卵を形成するメカニズムを詳細に明らかにすると共に、同前駆体をマーカーとした魚類の雌雄判定手法あるいは成熟度判定手法を開発しました。また、このような科学的なデータを基に幻の魚として知られるイトウの増養殖方法を確立する等、基礎研究成果の応用分野への活用を目指してきました。更に、通常は内因性女性ホルモン(エストロゲン)の作用により、雌親魚(成熟雌)の血液中にのみ出現するピテロジェニンやコロオジェニンが、外因性のエストロゲンの作用によって成熟雄や未成熟個体にも出現することに着目し、これらを測定・検出し指標とすることで、エストロゲン様内分泌攪乱化学物質(エストロゲン様環境ホルモン)による水環境の汚染状況を調査しました。当時、同様な調査は国内で行われておらず、世間に環境ホルモン汚染の概念を啓蒙するきっかけとなりました。また、同氏は調査活動に必要な技術を惜しみなく国内外の研究者に指導・譲渡し、その結果、同様な調査が中国・韓国等の水域で行われるに至っています。

これら魚類の卵形成に関する研究あるいは環境汚染調査に関する研究業績は、国内誌・国際誌に数多く発表され高い評価を得ています。さらに、同氏は、北海道大学大学院水産科学研究院の教授として後進の育成に尽力すると共に、北海道大学水産学部長および同大学院水産科学院長・水産科学研究院長を2期4年間務め、同機関の運営を精力的に行われました。その間、函館マリンバイオクラスター事業や人材育成事業の運営・統括を始め、大学内外における数々の委員会委員や

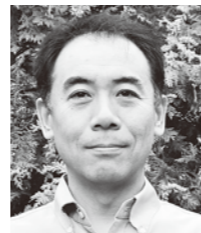
学会理事等に就任され、函館・道南地域の活性化はもとより、本邦の水産科学の発展に寄与されました。

このように、原氏の研究活動は、魚類の卵形成機構を解明するための基礎研究として重要であるだけでなく、環境科学分野においても高く評価されており、水産科学への貢献は極めて大きいものです。また、研究室あるいは研究機関の長として多忙な業務を献身的にこなす一方で、同氏の人情深く気さくな人柄によりもたらされた幅広い人脈を駆使し、産学官を繋いできた活動が評価され、上記2賞の受賞となりました。受賞を心からお祝い申し上げますと共に、我々後進への益々の御指導をお願いする次第です。

CONGRATULATIONS ON WINNING

山崎 浩司 准教授(平2食)
平成25年度日本食品科学工学会奨励賞受賞
 川合祐史(昭55食)

海洋応用生命科学部門水産食品科学分野 山崎浩司准教授(平2食)は、「蛍光*in situ*ハイブリダイゼーション法を応用した迅速細菌検査法の開発と食品微生物の制御」に関する一連の研究が評価され、平成25年度日本食品科学工学会奨励賞を受賞されました。



同氏は、平成2年に北海道大学水産学部水産食品学科食品製造学講座を卒業後、同大学院に進学し、平成5年に北海道大学水産学部に教員採用され、現職に至っています。これまで一貫して、水産発酵食品の微生物生態、有害微生物の迅速検出技術の開発、微生物制御技術の開発など、食品微生物学の分野で広く先進的な研究に従事してこられました。

今般の受賞は、細菌の特異的遺伝子配列を蛍光標識プローブとハイブリダイズして*in situ*検出する技術と公定法に用いられる培養検出法を組み合わせ、培養併用蛍光*in situ*ハイブリダイゼーション法(培養併用FISH)を構築し、特定の菌種の生菌のみを短時間に検出できる手法を各種食品衛生細菌の迅速定量技術に展開したことがまず評価されたものです。加えて、加工食品等で生菌数の過少評価の原因となる損傷菌についても、培養併用FISH法に損傷菌の回復プロセスを追加して、検出量向上にも成功し、実用化に向けた課題解決の成果も含まれています。この定量検出技術の適用範囲は、リステリア、ウェルシュ菌や、サルモネラ、大腸菌、黄色ブドウ球菌ほかに拡大されています。さらに、検出技術と密接に関係して、食品中の有害微生物(変敗菌、食中毒菌)の制御に関する研究についても評価されました。同氏は有害微生物対策として微生物の産生するバクテリオシンと呼ばれる抗菌性ペプチドの応用と新規探索について、精力的に研究展開されています。特にリステリアは、わが国では食事性集団感染の報告がほとんどない新興食中毒菌ですが、食品からの検出率は集団感染の頻発する欧米と遜色ありません。バクテリオシンは非加熱食品においてリステリアのリスクを低減させる有効な手段として注目されています。これらの研究成果は食品の安全供給に大きく貢献するものであり、同氏のご研究の一層の発展が期待されます。

退職教員あいさつ

北大を去るにあたって：
感謝の気持ちでいっぱいです
 吉水 守(昭47食)

本年3月31日をもって水産科学研究院を退職しました。正式な退職は昨年3月、一年間は再任用特任教員という立場でした。



昭和43年にラジオから流れた都ぞ弥生と時計台の鐘の音に魅せられて北海道にやってきました。私達の学年は大学紛争の真ただ中で、入学後すぐに自宅待機となり、再開後も教室でなく芝生の上で先生方からいろんなお話を伺いました。今振り返ると良い思い出です。その影響で学部移行は、現在と同じ3年生の4月となりました。昭和47年2月に札幌で開催された冬季オリンピックの余韻を胸に、翌月水産学部水産食品学科の微生物学講座を卒業しました。その後も院生として5年、学術振興会と水産科学研究奨励会の研究員として3年、水産学部にお世話になりました。

昭和55年に恩師の薦めで母校に奉職することになり33年が経過しました。この間、研究室および学部の先輩・先生方から研究の進め方、教員としてのありかた等、多くのことをご指導頂きました。風邪で休むこともなく無事職務を全うすることができましたこと、皆様のおかげと感謝しています。研究面では増養殖魚の病気対策を実践し、最後の10年少々は最終段階の漁獲物の衛生管理を手伝いました。

水産学部の行事としては、創基75周年と100周年の記念行事に立ち会うことができました。75周年記念行事では総務・記録係を務め、多くの同窓の方々の写真を資料館に納めることができました。100周年記念行事でも総務を務め、無事一つの大きな節目を超えることができました。

同時期、大学法人化後の最初の点検評価が実施され、水産学部の取り纏め役を仰せつかりました。自己点検・外部評価に際し、多くの教職員の皆様のご協力を得て無事終了することができました。他大学を含めた評価では、北大水産学部・水産科学研究科の産業を基盤とした研究と優れた人材の育成が高く評価されました。これからは一同窓生として、母校がよりいっそう研究分野で発展され、社会で活躍する人材を育成されることを願っています。

最後に北水同窓生の皆様のご健勝と水産学部・水産科学研究院の発展を願って退職の挨拶とさせていただきます。長い間ありがとうございました。

さようなら北大水産学部
 帰山雅秀(昭48ソ)

早いもので、今年3月末日に退職して3ヶ月が過ぎようとしております。函館での独身貴族のような優雅な生活は8年間に及びました。



振り返って、大学進学時に「生態学」にあこがれて北大水産学部へ。その後サケ科魚類の研究にこだわり40年。結果的に、生態学の階層性にそった形で研究を展開してきました。個体レベルではシロザケの初期生活史と条件戦略、個体群レベルでは密度依存効果、群集レベルではサケ属魚類の摂餌と栄養動態に基づく生物間相互作用ネットワーク、そして生態系レベルではサケ属魚類をキーストン種として長期的な気候変動と北太

平洋生態系の環境収容力、サケ属魚類の海起源物質輸送による陸域-海域生態系の相互作用に関する研究などです。北大水産科学研究院では、特にグローバル視点から生態系レベルでの研究を展開することができました。その結果が生態系をベースとしたサステナビリティ科学に基づく「サケ学」につながったと思っております。

一昔前、ノーガードさんの「裏切られた発展」が世界的に有名になりました。彼は地球を自然システムと人類の社会システムの相互作用である共進化として捉え、進化を考える上で多様性が最も重要であると述べています。しかし、人類は物質生産システムにより化石燃料に依存しすぎ、みんなカップリングされ、お互いへの影響が強くなりすぎて、心のケアを忘れてしまったとも述べています。これはまさに持続可能な社会づくりの基本的な視点です。私たちは2011年3月11日に未曾有の大震災を経験しました。現在、これまでの恩返しと持続可能な社会づくりへの貢献との思いから、震災復興に微力を投じております。

また4月からは北海道大学国際本部にて特任教授として、新渡戸カレッジの留学支援に携わっております。新渡戸カレッジではメンターとして北水を含む北大同窓会が重要な役割を果たしております。新渡戸カレッジへの皆さまのご協力よろしくお願いたします。

最後に、数多くのご支援とご協力を賜り、お世話になった北水同窓会の皆さまに深く感謝を申し上げますとともに、皆さまの益々のご健勝とご発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

北大水産学部を去るにあたって
 山口秀一(昭49ギ)

一昨年あたりから、同期の友人たちから定年の挨拶状が届き始めました。ああ、彼等ももう定年かと他人事のように思ってきましたが、本年3月いよいよ自分の定年退職を迎えることとなりました。



昭和49年漁業航海学講座を卒業、50年特設専攻科を修了し、51年4月おしよ丸丸3等航海士に赴任して以来37年の間水産学部にお世話になりました。

また、練習船勤務時代には、各寄港地において同窓各位様に温かい歓迎をしていただきお礼申し上げます。この間、おしよ丸IV世の竣工・学部改組・特設専攻科の廃止・練習船北星丸の廃船など、いろいろなことがありました。自分自身も病気のため下船しなければならず一時落ち込んだこともありましたが、無事に定年まで勤務できましたことは学部の皆様のおかげであると感謝しています。今顧みて最も印象に残っているのは、おしよ丸IV世でチュクチ海に初めて入域したことです(おしよ丸III世では一度入域していますが)。初めて氷群を私の夜の当直で見つけましたが、レーダーにも写らずまた聞いてたような気温・水温の急下降もなく思わず反転しました。その後、船長を呼んでまた反転明るくなってから海海のなかの解水面に進入、途中セイウチを氷上に見つ海洋観測等を行いました。途中氷水が船体に当たりゴーンと音が船内に響き大丈夫かなと心配したりしましたが、ただたんにペイントが剥がれたくらいで杞憂に終わりました。

終わりにりましたが、これまで学生時代を含めいろいろとお世話になった北水同窓会の皆様方には深く感謝を申し上げますと共に、北大水産学部のますますの発展と北水同窓会のますますの隆盛を祈念して、退職の挨拶とさせていただきます。長い間有り難うございました。

追悼寄稿

上野元一先生(昭16後キ)のご逝去を悼んで

高橋豊美(昭44エ)

平成25年6月16日、元北海道大学水産学部教授上野元一先生は前立腺がんのため、91歳11カ月の生涯を終えられました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。



上野先生は大正10年7月16日、愛媛県今治市の波止浜にてお生まれになりました。お父様が蟹工船の独航船の船長として北洋漁業に携わっており、先生は漁業学の勉学を目指し、本校の前身である函館高等水産学校(3年制)漁撈学科に入学されました。戦時中の昭和17年に同学科をご卒業後、樺太の海洋気象台勤務等を経て学校に戻り、北海道大学水産学部が設置された昭和24年、遠洋漁業学科遠洋漁業学教室(斎藤市郎教授)の助教授に採用され、昭和60年3月に漁業学科漁場学講座教授を定年退官するまで40年以上もの長い年月を教育と研究にご尽力されました。

ご専門は、海洋生活期におけるサケ・マス類の摂餌生態に関する研究でした。思い出されるのは、食物の消化管内移動速度を調べる実験で、七飯養魚実験施設(当時久保達郎施設長)より提供を受けたニジマスに餌を与え、排泄されるまで一定時間ごとに軟X線で撮影していく、という内容でした。実験は、先生と私で交替しながら夜通し続けましたが、先生と親しい事務方の某氏が用意して下さった明け方の味噌汁は空腹に沁みて、その旨さは今でも忘れられません。

先生は胃標本やプランクトン標本を収集するため、度々乗船されていました。初めてご一緒させて頂いたのは全鮭連の調査船「親潮丸」という船で、ときには厳しく船内生活マナーのノウハウを教えてくださいました。のちに本学研究調査船「うしお丸」でも何度かご一緒しましたが、先生が全く船酔いしないのには驚きました。大しけになって全員がダウンしたときも、先生は大揺れで散らかった実験室を一人で黙々と片付けられていた光景が目には焼き付いています。

私の修士論文は北洋のギンザケを対象にしたものですが、上野先生が研究計画の素案を作って下さい

ました。博士課程ではニシンに切換えて幾つかの論文を学会誌に発表しましたが、先生から、「ニシンの成果を博士論文として纏めなさい」と言われました。私はまだそのレベルには達していないと思っていたので、「ニシンで書く気はありません」と返答したところ、「世の中、そんなに甘いものじゃないぞ」とお叱りを受けました。随分生意気なことを言ったものですが、先生はその後の研究を暖かく見守り、支えて下さいました。

上野先生が退官される前年は、当講座では助教授の前田辰昭先生、助手の私、大学院生の中谷敏邦氏が相次いで博士論文を申請しましたので、先生は主査として大変お忙しく過ごされました。私の場合はかなり遅れており、その年の提出は難しいかなと思っておりましたが、ある日教授室に呼ばれて、「講座の雑用は自分がやるので君は一切やらなくていい」と言われました。生意気な口を利いていた自分を恥ずかしく思うと同時に、先生から賜ったご恩情は終生忘れるものではありません。

上野先生は人との絆(きずな)を大切にされた方でした。おそらく先生の発案だと思われそうですが、当時、我々の講座では毎月積み立てをして、毎年のように教官と事務官(佐藤かのさん)の家族全員で、時には大学院生を含めて道内各地を旅行しました。先生は講座内の家族ぐるみの交流にも心配りをされていたように思います。

上野先生は、学生や大学院生一人一人の進路・就職についても親身になって下さいました。そして、卒業後のことも気にかけて、よくお手紙を書いておられました。先生は博学多識な方でした。聞き上手でもありましたので、学内で親しい先生方も多く、先生はいつもその輪の中心におられました。先生が退官された年に、ご自身のご要望で「遠漁・漁場学講座史」が作られましたが、題字「きずな」は先生によるものです。

先生は70歳代になってがんが見つかったものの、最近まで結構お元気で趣味の囲碁などを通して毎日を楽しみ過ごされていました。まだまだお付き合いさせて頂けるものと思っておりましたのに、先生の笑顔をもう見る事ができなくなったのは本当に残念でなりません。今は恩師である先生のご冥福をお祈りするばかりです。

安住幸彦君(昭24エ)の死を悼む

今野宗郎(昭24エ)

例年に比べ特にこの冬の寒さは厳しいといわれるなか、去る二月五日級友安住幸彦君が急逝した。惜しい限り悲しい限り淋しい限りである。心から哀悼の意を捧げ、冥福を祈らずには居られぬ気持である。彼とは共に仙台市の出身で彼は旧制二中、私は旧制一中、北水卒業後、共に昭和二十六年海上保安庁入庁第一線で勤務したが、彼は一貫して海上勤務、私は庁内教育機関を含めどちらかといえば陸上勤務が多かった。その故か、海上勤務を優遇する海上保安庁において、彼は釧路海上保安部で二人ともに退職時、その退職金が私より遥かに上廻った。“ベットとふとんの違いサ!!”と言って豪快に笑った笑声がいまだに耳に残っている。小柄な割には肝が太く荒天をあまり気にしない根っからの船乗りであった。釧路の巡視船そうや船長時代、人の前では部長である私の顔を立てて敬語を使っていたが、二人だけになると途端に同級生の間柄に返って遠慮のないやりとりをして、在勤の三年間よく部長室で雑談した。昨日のこのように思い出される。

東京の霞ヶ関の庁舎で二人揃って勲四等瑞宝章を受章したのが、最後に会った時となった。彼の功績を知る者の一人として、彼が生きた海上保安庁の第一線の三十六年間を強く顕彰したいと思うものである。

名誉教授鈴木 翼先生(特)のご逝去

関 秀司(昭57化)

名誉教授 鈴木 翼氏は、平成25年1月27日に享年73歳でご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

鈴木先生のお通夜は、先生が御活躍された化学工学部・北海道支部のセミナーと研究発表会が函館キャンパスで開催される前日にとり行われました。御親交のあった北海道大学工学部や室蘭工業大学の先生方も御出席され、水産学部の先生方や卒業生とともに先生を偲んで語り合い、御冥福をお祈りいたしました。



鈴木先生がコンピューターに精通されていることは学内で有名でしたが、野球やサッカー等のスポーツにも精通されていました。Jリーグが開幕した頃は横浜マリノスの熱烈なサポーターで、ファンクラブに所属しBBSでもDr. Marinosというハンドルネームを名乗っておられたほどでした。スポーツに対しても研究と同様に理論派で、試合があった翌朝は必ず実験室に来られて、前日の試合の選手の動きやフォーメーションについて熱く語っておられたのを懐かしく思い出します。

鈴木先生は、昭和16年10月5日東京都にお生まれになり、昭和39年3月に北海道大学工学部合成化学工学科を卒業後、同大学大学院工学研究科に入学し、昭和41年3月に同修士課程を修了されました。昭和41年4月に同大学院工学研究科博士課程に入学、昭和44年3月に同課程を単位取得退学、昭和44年4月1日に日本学術振興会奨励研究員に採用されました。その間、同年9月30日に同大学院同研究科博士課程を修了、昭和44年12月31日に同研究員を退職、昭和45年1月1日に北海道大学水産学部講師に採用されました。その後、昭和51年4月に同大学水産学部助教授、昭和57年4月に同大学水産学部教授に昇任され、平成17年3月に停年により北海道大学を退職、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

鈴木先生は、化学工学や水処理工学に関する教育と研究に精力的に取り組み、多くの重要な業績を挙げられました。水産廃棄物の有効利用を目的として、イカやホタテ貝の内臓からカドミウムを除去する競争吸着法を開発し、養殖飼料への有効利用に大きく貢献されました。また、2003年にはタンパク質を素材とした生分解性凝集剤を開発し、特許を取得されました。

早くから教育と研究におけるコンピューターの重要性を重視し、情報基盤センター協議員会協議員、同センター全国共同利用委員会委員を長く務められ、本学の情報処理教育の充実に貢献されました。

以上のように、同氏は研究者として優れた業績を挙げられ、学術の振興に貢献されたほか、教育者としても優秀な人材を数多く世に送り出され、我が国の高等教育と学術の発展に貢献されました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

北水同窓会定期総会報告

北水同窓会総会の報告

●開催日時：平成25年5月25日 ●会場：ウェスティンナゴヤキャッスル

北水同窓会愛知県支部は8年ぶりに2回目の定期総会を名古屋城の隣のホテルにて開催しました。北は北海道、南は沖縄県から80名近い方にお集まりいただきました。

早い方は12:00過ぎから集まり同窓との話が花が咲きました。

定期総会は13:30から愛知県支部幹事長神保重孝(昭54ギ)さんの司会のもと平石智徳副幹事長(昭51ギ)の開会の辞ではじまり、議長には愛知県支部長藤井洋治(昭42ギ)を選出し早速、議事に入りました。高橋是太郎幹事長(昭50食)ほか各幹事の説明のあと、藤井議長のもと各議案はすべて承認され終了しました。

総会終了後、14:00から講演会が行われ、山口皓(昭44エ)さんの司会で講師の堀込智之(昭46ギ)、光子夫妻の紹介がされました。

光子様からは『石巻市長面 大津波の被災体験』と題して、被災当時の模様を40分ほどお話をいただきました。そのあと智之博士より『海岸を襲う津波のメカニズム—現地調査と実験を通じて』と題して、実験をまじえ、津波をわかりやすく解析説明いただきました。被災後3年目に入りましたが、早い復興をお祈りします。

講演会終了後16:00から会場を名古屋城天守閣が見える『天守の間』に移し、懇親会を行いました。

山本大輔(平18生)さんの司会のもと、藤井愛知県支部長の歓迎のあいさつ、横山清同窓会会長(昭35エ)のあいさつ、嵯峨直恆名誉会長のあいさつでは水産学部の近況としておしよ丸が来年竣工

します。また函館ドック跡地に新水産・海洋都市としての研究施設ができます。学部の建物が老朽化のため、建て直しが進められます。

そのあと来賓の三上隆副学長より大学の近況報告として総長の交代(佐伯総長から山口総長に)、ホームカミングデーを今年(9/28)も開催します等のお話がありました。

深谷勲愛知県支部顧問(昭36セ)の乾杯の音頭で飲食開始となりました。

8卓の各テーブルで懇親がはじまりました。しばらく歓談のあと、出席されている各支部長(東京、静岡、長野、大阪)より挨拶をいただきました。また出席者の最長老の神山茂郎(昭19セ)さん、はるか沖縄の今帰仁村よりの水野隆夫(昭44エ)さんよりあいさつをいただきました。また15名の方が出席された36年製造学科を代表して大阪から来られた大野正浩(昭36セ)さんより挨拶をいただきました。引き続き懇談があちこちで続けました。

最後に伊藤浩(昭62化)さんの音頭のもと、全員で輪を作り『都ぞ弥生』『水産放浪歌』を斉唱しました。神保幹事長の閉会のあいさつにより18:00に終了しました。

来年の開催地は函館です。

皆さん函館でまたお会いしましょう。

愛知県支部長 藤井洋治(昭42ギ)



定期総会



堀込博士夫妻



藤井愛知県支部長のあいさつ



横山同窓会長のあいさつ



嵯峨学部長のあいさつ



三上副学長のあいさつ



深谷愛知県支部顧問



「都ぞ弥生」合唱

式次第

定期総会 司会 愛知県支部幹事長 神保重孝(昭54ギ)

●開会の辞……………本部副幹事長 平石智徳(昭51ギ)

●議長選出……………愛知県支部長 藤井洋治(昭42ギ)

議案第1号 平成24年度事業経過報告および会計決算報告

……………本部幹事長 高橋是太郎(昭50食)他

議案第2号 平成25年度事業計画および予算案報告

……………本部幹事長 高橋是太郎(昭50食)他

その他

●閉会の辞……………本部副幹事長 平石智徳(昭51ギ)

講演会

司会 山口皓(昭44エ)

●演題「被災体験談」……………堀込光子様

●演題「海岸を襲う津波のメカニズム—実験と東日本震災津波の現地調査を通じて」……………堀込智之博士(昭46ギ)

懇親会

司会 山本大輔(平18生)

●歓迎のあいさつ……………愛知県支部長 藤井洋治(昭42ギ)

●同窓会長あいさつ……………会長 横山清(昭35エ)

●名誉会長あいさつ……………学部長 嵯峨直恆(特別)

●来賓のあいさつ……………副学長 三上隆

●乾杯の音頭……………愛知県支部顧問 深谷勲(昭36セ)

●歓談

●各支部長他あいさつ

東京都、静岡県、長野県、大阪府、神山様、水野様

●卒業年度別あいさつ

●『都ぞ弥生』斉唱……………伊藤浩(昭62化)

●『水産放浪歌』斉唱

●閉会のあいさつ……………愛知県支部幹事長 神保重孝(昭54ギ)

出席者

〈全国各支部〉

神山茂郎(昭19セ) 神奈川県

安井敬一(昭24エ) 神奈川県

横山清(昭35エ) 同窓会会長

大野正浩(昭36セ) 大阪府

藤井明(昭36セ) 大阪府

角田靖雄(昭36セ) 神奈川県

石川光男(昭36セ) 東京都

浅倉健治(昭36セ) 千葉県

鈴木賢一(昭36セ) 千葉県

西川雄造(昭36セ) 神奈川県

新田実(昭36セ) 東京都

筒井公(昭36エ) 長野県

山田俊夫(昭36セ) 神奈川県

町田健治(昭36ゾ) 東京都

山成克二(昭37セ) 東京都

小野里坦(昭37ゾ) 長野県支部長

中島興基(昭39ギ) 千葉県

小林正昌(昭39ゾ) 京都府

畦地清信(昭40ゾ) 千葉県

岸本富男(昭42ギ) 北海道

橋本啓芳(昭42ギ) 東京都

水戸孝夫(昭43ギ) 北海道

吉川圭一(昭44エ) 大阪府

三ツ野勝廣(昭44食) 静岡県支部長

水野隆夫(昭44エ) 沖縄県

入江和彦(昭45ギ) 大阪府

木嶋武郎(昭45エ) 静岡県

上田稔(昭45化) 大阪府

猪俣哲美(昭47食) 千葉県

田中文夫(昭50食) 大阪府支部長

浜谷一郎(昭51化) 東京都

菅原謙二(昭51ギ) 東京都

大村泰治(昭51食) 大阪府

村越武(昭53ギ) 静岡県

佐々木雅人(昭56化) 大阪府

廣瀬裕(昭59食) 大阪府

池谷幸樹(平6ゾ) 岐阜県

福沢朋(平20資) 大阪府

第93回 北水同窓会定期総会報告

〈本部〉

嵯峨直恆(特別)名誉会長
高橋是太郎(昭50食)幹事長
平石智徳(昭51ギ)副幹事長
蛇沼俊二(昭53ギ)庶務部
向井徹(昭61ギ)庶務部
齊藤誠一(昭50ギ)組織部
東藤孝(平2ゾ)会計部
三上隆 副学長

〈講演〉

堀込智之(昭46ギ)講演者招待
堀込光子 講演者招待

〈愛知県支部〉

野畑順二(昭24セ)
柴田勝明(昭31エ)
深谷勲(昭36セ)顧問
本多純夫(昭36セ)
内田奎司(昭37ギ)
川西義孝(昭37セ)
荒井城一(昭37ゾ)
三栗茂(昭39ギ)
近藤忠美(昭40ギ)
原田洋一(昭40ギ)
兼崎英勝(昭41セ)
藤井洋治(昭42ギ)支部長
重田親司(昭44エ)
山口皓(昭44エ)
早瀬茂雄(昭45ギ)
武田喜美男(昭46食)
小池徳治(昭53化)
神保重孝(昭54ギ)幹事長
田中利幸(昭58ギ)
三輪喜之(昭59ゾ)
三輪佳子(昭59ゾ)
宮本淳司(昭60ギ)
伊藤浩(昭62化)
山本大輔(平18生)

■総会次第

1. 開会の辞 副幹事長 平石 智徳(昭51ギ)

2. 議長選出

3. 議案第1号

平成24年度事業経過報告および会計決算報告
(1) 一般経過報告
幹事長 高橋是太郎(昭50食)
(2) 庶務部報告(資料1)
庶務部 向井 徹(昭61ギ)
(3) 編集部報告(資料2)
編集部 細川 雅史(平2食)
(4) 組織部報告(資料3)
組織部 齊藤 誠一(昭50ギ)
(5) 会計部報告(資料4)
会計部 東藤 孝(平2ゾ)
(6) 会計監査報告
監事 矢部 衛(昭51ゾ)

4. 議案第2号

平成25年度事業計画および予算案
(1) 平成25年度役員改選案(資料5)
庶務部 向井 徹(昭61ギ)
(2) 第94回(平成25年度)定期総会開催地(函館)
について 幹事長 高橋是太郎(昭50食)
(3) 平成25年度予算案
1. 会計部予算案(資料6)
会計部 東藤 孝(平2ゾ)
2. 編集部予算案(資料7)
編集部 細川 雅史(平2食)
3. 組織部予算案(資料8)
組織部 齊藤 誠一(昭50ギ)

5. その他

6. 閉会の辞

副幹事長 平石 智徳(昭51ギ)

■平成24年度 庶務部報告(資料1)

1) 新入会員数

海洋生物科学科 52名
海洋資源科学科 58名
増殖生命科学科 52名
資源機能化学科 55名
水産海洋科学科 1名
海洋生物生産科学科 1名
大学院(他大学、他学部出身者)
修士 17名
博士 6名
合計 242名

2) 本年度物故者(平成24年度親潮掲載分)

正・準会員 85名
名誉、特別会員 1名
合計 86名

3) 会員現在数(3月15日現在)

正・準会員総数 14,476名
物故正・準会員数 2,927名
正・準会員現在数 11,549名
(内準会員数) (19名)
名誉会員数 1名
特別会員数 69名
会員数合計 11,619名

4) 新入会員を含めた会員現在数(3月15日現在)

合計 11,861名

■平成24年度 編集部報告(親潮発行)(資料2)

	号数	発行年月日	全頁数	印刷部数	印刷費	摘要
予算	299号	平24年8月末	本誌 32頁 (内カラー7頁)	8,500	1,000,000	※1
	300号	平25年2月末	本誌 32頁 (内カラー7頁)	8,500	1,000,000	※1
	合計		64	17,000	2,000,000	
決算	299号	平24年8月30日	本誌 28頁 (内カラー6頁)	8,500	913,027	※1
	300号	平25年2月26日	本誌カラー 24頁 (内カラー7頁)	8,500	841,627	※1
	合計		52	17,000	1,754,654	

※1 印刷会社: (有)三和印刷
印刷費には別刷り振替用紙代、消費税を含む

第93回 北水同窓会定期総会報告

■平成24年度 組織部報告 (名簿会計) (資料3)

	項 目	予算額	決算額	摘 要
収 入	前年度繰越金	999,208	999,208	名簿積立金
	一般会計より繰入 受 取 利 子	700,000	700,000 361	
	合 計	1,699,208	1,699,569	
支 出	次年度繰越金	1,699,208	1,699,569	
	合 計	1,699,208	1,699,569	

(繰越金の内訳 銀行預金 1,699,569円)

■平成24年度 会計部報告 (資料4)

1)平成24年度 一般会計決算報告

	項 目	予算額	決算額	摘 要	
収 入	前年度繰越金	708,232	708,232	1,897名 予算2,000名	
	会費	8,000,000	7,578,000		
	親潮広告料	200,000	180,000		
	雑収入	100,000	215,597		
	合 計	9,008,232	8,681,829		
支 出	親潮印刷費	2,000,000	1,754,654	(資料2) 親潮発送費 2回分含む (愛知)	
	通信・運搬費	1,300,000	1,315,237		
	総会旅費	800,000	800,000		
	組織強化費	700,000	644,240		
	備品費	50,000	0		
	消耗品費	250,000	157,134		
	会議費	50,000	30,000		
	振替手数料	160,000	151,525		
	事務嘱託費	2,250,000	2,250,865		
	備人費	130,000	105,000		
	HP維持費	240,000	240,000		
	雑費	20,000	4,072		
	OA機器整備費	100,000	50,000		積立 (資料3) 札幌ホームカミングデー経費
	名簿会計へ 予備	700,000	700,000		
次年度繰越金	258,232	247,815			
	合 計	9,008,232	8,681,829		

収支差引額(平成25年度に繰越)
231,287円(繰越金の内訳:
銀行預金 162,638円、現金 68,649円)

2)平成24年度 OA機器整備費(積立)決算報告

	項 目	予算額	決算額	摘 要
収 入	前年度繰越金	100,035	100,035	
	一般会計より積立 受 取 利 子	100,000	50,000 20	
	合 計	200,035	150,055	
支 出	次年度繰越金	200,035	150,055	
	合 計	200,035	150,055	

(繰越金の内訳: ゆうちょ銀行 150,055円)

3)平成24年度 特別会計決算報告

	項 目	予算額	決算額
収 入	前年度繰越金	21,240,486	21,240,486
	ゆうちょ銀行利息 定期預金(マリンバンク)利息		24 4,098
	合 計	21,240,486	21,244,608
支 出	次年度繰越金	21,240,486	21,244,608
	合 計	21,240,486	21,244,608

○平成24年度 特別会計資産内容

項 目	資 産 額
郵便定期貯金1口	7,204,000
ゆうちょ銀行預金	90,122
銀行定期預金 (マリンバンク)2口	13,950,486
合 計	21,244,608

■会計監査報告

北水同窓会の平成24年度における会計監査を実施した結果を下記のとおり報告致します。

記

1. 監査対象期間 自 平成24年3月16日
至 平成25年3月15日
2. 出納簿は、関係書類と対査の結果適正である。
3. 現金及び預貯金は、出納簿に照合し適正である。
以上

平成25年3月21日

監事 矢部 衛
監事 増田 宣

食品工場・厨房内の 自主検査のお手伝いをします。

HACCP・ISO 導入指導及び検証・評価・改善指導

★食品の微生物検査 ★施設類・道具・器具類の拭き取り検査 ★食品の賞味期限の設定
★食品・副資材・調理室内の微生物の除殺菌テスト ★衛生関係資材の販売
★各温度帯における保存テスト ★その他衛生指導、社員教育などのご相談をお受けします。

株式会社 キュー・アンド・シー

代表取締役 奥野 和弘 昭和42年製造

松原 伸二 昭和62年化学 久保 雅俊 平成12年資源 中川 恵介 平成23年生命 笹原 麻未 平成23年生命

分析室 〒065-0026 札幌市東区北26条東22丁目6-7 TEL:011-786-8300 FAX:011-786-8266
URL: http://www.qandc-lab.com/ E-mail: haccp@qandc-lab.com

第93回 北水同窓会定期総会報告

■平成25年度 役員改選案

(資料5) [○は新任]

会長
横山 清(昭35エ)

名誉会長
嵯峨 直 恆(特別会員)

副会長
鈴木 賢 一(昭36セ)
吉野 生 壮(々37ゾ)
○樋口 達 夫(々50食)

相談役
遠藤 信 二(々13ヨ)
宮原 九 一(々14ギ)

代表理事
○桜井 泰 憲(々48ゾ)

学内理事
今野 久仁彦(々49食)
齊藤 誠 一(々50ギ)
高橋 是太郎(々50食)
板橋 豊(々50化)
門谷 茂(々50化)
飯田 浩 二(々51ギ)
平石 智 徳(々51ギ)
荒井 克 俊(々51ゾ)
中谷 敏 邦(々52ギ)
梶原 善 之(々53ギ)
清水 晋(々53ギ)
蛇沼 俊 二(々53ギ)
宮澤 晴 彦(々53ギ)
山下 成 治(々54ギ)
尾島 孝 男(々54化)
木村 暢 夫(々55ギ)
川合 祐 史(々55食)
足立 伸 次(々55ゾ)
安井 肇(々55ゾ)
山羽 悦 郎(々55ゾ)
工藤 勲(々57化)
関 秀 司(々57化)
高木 省 吾(々58ギ)
都木 靖 彰(々59ゾ)
岸村 栄 毅(々60化)
向井 徹(々61ギ)
亀井 佳 彦(々61ギ)

水田 浩 之(昭61ゾ)
宗原 弘 幸(々61修ギ)
○高津 哲 也(々63ギ)
○安藤 靖 浩(々63化)
○今村 央(々63ゾ)

監事
矢部 衛(々51ゾ)
増田 宣 泰(々51化)

学外理事
木村 順 治(々26ギ)
山内 彬 一(々26ギ)
○前田 辰 昭(々26エ)
中村 哲 也(々28セ)
寺地 潔(々28ゾ)
大島 栄 一(々30エ)
富田 幸 二(々30セ)
服部 保次郎(々31エ)
○羽田野 六 男(々31セ)
箕田 嵩(々31ゾ)
高野 和 則(々32ゾ)
島崎 健 二(々33エ)
高島 優(々33エ)
山崎 文 雄(々33ゾ)
菊地 英 樹(々34エ)
米田 義 昭(々34セ)
齊藤 勝 男(々34ゾ)
梨本 勝 昭(々36ギ)
小祝 良 介(々36エ)
大割 了(々37ギ)
繪面 良 男(々37セ)
河村 章 人(々37ゾ)
古井 恒 弘(々37ゾ)
麦谷 泰 雄(々37ゾ)
安間 元(々38エ)
西田 清 義(々38セ)
天下井 清(々39エ)
菅野 泰 次(々39ゾ)
小越 征 夫(々40エ)
木村 昇(々40セ)
猪上 徳 雄(々41セ)
上 平 幸 好(々41ゾ)

岸本 富 男(昭42ギ)
山本 勝太郎(々42ギ)
池田 勉(々43ゾ)
仲谷 一 宏(々43ゾ)
高橋 豊 美(々44エ)
工藤 昭 彦(々44ゾ)
志賀 直 信(々44ゾ)
山内 皓 平(々44ゾ)
伊藤 悦 郎(々45ギ)
三浦 汀 介(々45ギ)
三佐川 稔(々45ギ)
築田 満(々45化)
後藤 晃(々45ゾ)
阿部 周 一(々46ゾ)
原 彰 彦(々46ゾ)
中林 重 雄(々47ギ)
目黒 敏 美(々47ギ)
近江 政 斗(々47食)
○吉水 守(々47食)
黒瀬 道 則(々47ゾ)
土谷 俊 一(々48ギ)
坂本 幸 造(々48食)
○帰山 雅 秀(々48ゾ)
吉田 正 人(々48ゾ)
○山口 秀 一(々49ギ)
二瓶 幹 雄(々50食)
上戸 慶 一(々50化)
長谷川 栄 治(々52食)
上野 孝 雄(々53ギ)
上野 久仁夫(々53化)
備前 悟(々53化)
広崎 淳 一(々55ギ)
正木 悦 郎(々55ギ)
宮岡 秀 昌(々55ゾ)
西川 正 一(々56ギ)
種田 貴 司(々56食)
藤田 公 美(々57ギ)
小林 良 一(々57食)
佐藤 友 則(々57食)
嶋田 隆 司(々57化)

学外幹事

阿部 純 也(昭58ギ)
横山 信 一(々58ギ)
佐藤 直 孝(々58食)
吉岡 武 也(々60食)
今野 伸(々62食)
宮崎 永 司(平1ギ)
柳町 琢 也(々4化)
阿部 慶 太(々5化)

地方理事

(稚内) 風 無 成 一(昭41ギ)
(留萌) 祐 川 正 幸(々48ゾ)
(紋別) 片岡 靖(々42ゾ)
(網走) 金澤 克(々40セ)
(根室) 望月 英 明(々30セ)
(厚岸) 未定
(釧路) 清 水 富士雄(々36エ)
(旭川) 斉藤 隆 司(々46化)
(十勝) 佐藤 裕(々24セ)
(苫小牧) 木村 実(々48食)
(室蘭) 矢島 清 孝(々45食)
(札幌) 林 和 明(々38ゾ)
(札幌) 眞田 篤 弘(々43化)
(札幌) 村井 茂(々45ゾ)
(小樽) 山本 貞 夫(々46化)
(余市) 川村 一 廣(々33ゾ)
(青森) 佐藤 立 治(々36エ)
(八戸) 山内 寿 一(々40セ)
(秋田) 赤間 健太郎(々41ゾ)
(村山) 未定
(庄内) 村井 太 郎(々50ギ)
(盛岡) 奥山 勇 作(々54ゾ)
(宮古) 和田 秀 雄(々60ギ)
(釜石) 高橋 禎(々56ゾ)
(仙台) 佐藤 秀 雄(々42ギ)
(石巻) 小池 幾 世(々53ギ)
(気仙沼) 千葉 敏 朗(々46ゾ)
(福島) 高越 哲 男(々44ゾ)
(茨城) 原田 和 民(々24教ゾ)
(栃木) 大友 時 夫(々44ゾ)
(埼玉) 吉川 晴 二(々41ゾ)

(館山) 安田 健 治(昭56食)
(銚子) 山口 隆 夫(々53化)
(千葉) 〇萬上 聰一郎(々42ゾ)
(東京) 未定
(東京) 菊本 肇(々40ギ)
(神奈川) 金庭 正 樹(々57化)
(三崎) 寺本 紀 久(々39セ)
(新潟) 宮島 英 雄(々42ギ)
(長野) 小野里 坦(々37ゾ)
(静岡) 三ツ野 勝 廣(々44食)
(富山) 宮崎 護(々41セ)
(石川) 未定
(福井) 国田 裕(々45食)
(愛知) 藤井 洋 治(々42ギ)
(京都) 〇近藤 忠 裕(々54化)
(滋賀) 澤田 宣 雄(々57ゾ)
(三重) 未定
(大阪) 田中 文 夫(々50食)
(兵庫) 中岸 明 彦(平元ギ)
(和歌山) 小橋 保 智(昭32ギ)
(鳥取) 山本 栄 一(々52ゾ)
(岡山) 鈴木 伸 一(々50ギ)
(広島) 森岡 泰 啓(々38ゾ)
(島根) 中村 幹 雄(々42ゾ)
(関門) 萬年 信 一(々37エ)
(香川) 小野 知 足(々34ゾ)
(愛媛) 桑原 彰 三(々53ゾ)
(徳島) 小黒 美 樹(々23セ)
(高知) 蒲原 幸 男(々49ギ)
(福岡) 未定
(佐賀) 花城 勝 也(々26ギ)
(長崎) 征矢野 清(々61ゾ)
(熊本) 安田 広 光(々58食)
(大分) 武田 晴 美(々56ギ)
(宮崎) 児玉 康 則(々50ギ)
(鹿児島) 松岡 達 郎(々52ギ)
(沖縄) 西銘 史 則(々54修ギ)
(北米地区連絡所・北米エルム会内)
真板 洋 輔(昭32エ)

平成25年度 本部常任幹事
直通電話番号
市外局番(0138)

幹事長
○齊藤 誠一(昭50ギ)40-8843

副幹事長
○尾島 孝男(昭54化)40-8800

庶務部
蛇沼 俊二(昭53ギ)40-8838
○水田 浩之(昭61ゾ)40-5534
浦 和寛(平3ゾ)40-8859

会計部
高津 哲也(昭63ギ)40-8822
○藤本 貴史(平12生)40-5536

編集部
安藤 靖浩(昭63化)40-8803
○田中 啓之(平元化)40-8809
宮下 和士(平3ギ)40-8856

組織部
○川合 祐史(昭55食)40-5583
澤辺 智雄(平元食)40-5569

事務局
吉田 秀美 42-3681

第93回 北水同窓会定期総会報告

■平成25年度 会計部予算案 (資料6)

1)平成25年度 一般会計予算案

項目	予算額	摘要
収入		
前年度繰越金	231,287	1,800名見込み
会費	7,200,000	
親潮広告料	180,000	
雑収入	100,000	
特別会計より	2,000,000	
合計	9,711,287	
支出		
親潮印刷費	2,000,000	(資料7) 親潮送費(2回分)含む 函館開催 ※ @20,000円×12回 積立 (資料8)
通信・運搬費	1,300,000	
総会旅費	100,000	
組織強化費	900,000	
札幌ホームカミングデー経費	300,000	
函館ホームカミングデー経費	100,000	
備品費	0	
消耗品費	250,000	
会議費	30,000	
振替手数料	160,000	
事務嘱託費	2,250,000	
備人費	130,000	
HP維持費	240,000	
雑費	20,000	
OA機器整備費	50,000	
名簿会計へ	1,200,000	
予備費	681,287	
合計	9,711,287	

※総会補助30万円、本部役員会補助10万円、卒業祝賀会補助10万円を含む。

■平成25年度 編集部予算案 (親潮発行) (資料7)

号数	発行年月日 (縮切り)	全頁数	印刷部数	印刷費	摘要
301号	平25年8月末 (7月10日)	本誌 32頁 (内カラー7頁)	8,500	1,000,000	※1
302号	平26年2月末 (1月10日)	本誌 32頁 (内カラー7頁)	8,500	1,000,000	※1
合計		64	17,000	2,000,000	

■平成25年度 組織部予算案 (名簿会計) (資料8)

項目	予算額	摘要
収入		
前年度繰越金	1,699,569	名簿積立金
一般会計より繰入	1,200,000	
名簿広告料	2,000,000	
合計	4,899,569	
支出		
名簿印刷費	3,500,000	3,500部予定 メール便
通信運搬費	280,000	
次年度繰越金	1,119,569	
合計	4,899,569	

2)平成25年度 OA機器整備費(積立)予算案

項目	予算額
収入	
前年度繰越金	150,055
一般会計より積立	50,000
合計	200,055
支出	
次年度繰越金	200,055
合計	200,055

3)平成25年度 特別会計予算案

項目	予算額
収入	
前年度繰越金	21,244,608
合計	21,244,608
支出	
一般会計へ	2,000,000
次年度繰越金	19,244,608
合計	21,244,608

○平成25年度 特別会計資産内容

項目	資産額
郵便定額貯金1口	7,204,000
ゆうちょ銀行預金	1,114,296
銀行定期預金 (マリンバンク) 2口	10,926,312
合計	19,244,608

※1 印刷会社：(有)三和印刷
印刷費には別刷り振替用紙代、消費税を含む。

寄稿

漁業資源研究を顧みて

前田辰昭 (昭26エ)

私は戦後の昭和27年12月に遠洋漁業学科を卒業して水産学部に勤務した。当初(昭28年)は水産学部遠洋漁業学科の遠洋漁業学講座に所属し、講座には恩師の故斎藤市郎教授(昭7ギ)、上野元一助教授(昭16後ギ)に事務員故佐藤かの女史(旧姓野口)に助手の私と4名体制であった。

斎藤先生から「研究は現場から学べ」という厳しい指導を受け、以来平成4年に水産学部定年退官後も今日に至るまで約60年間、調査船に乗り組みながら現場の漁場調査研究一筋を貫いてきた。

戦後の我が国は食糧増産が急務で、国策に沿った遠洋漁場の開発による漁獲量増大に貢献すべく、北星丸I世(故藤井武治船長：昭18ギ)に乗船して、斎藤市郎先生が研究されていた「日本海武蔵堆周辺底魚漁場の新規開発研究」や「北海道東部海域のサケ・マス調査」に参加した。

それらの経験を生かして、昭和30年には水産庁から依頼されて75トンの木造船第15みなど丸船長兼研究者として、北星丸から借用した六分儀で濃霧が多い水域で、天測して船位を確認しながら「カムチャッカ半島西岸20マイル沖合の北緯53度から北緯59度、水深60m～400m間に生息している底魚資源と、サケ・マス漁場調査」をし、昭和31年には独航船10隻を指揮して、小樽港所属第5松栄丸(75トン)船長として、4～6月の低気圧通路に当たり20mを超える大時化の中で「北太平洋北緯46度以南海域のサケ・マス漁場調査」をして、魚群分布と回遊機構の解明に務めた。

その後、「北星丸II世(故三島清吉船長：昭19ギ)によるオホーツク海のサケ・マス漁場研究」や「おしよ丸II世(故藤井武治船長)による北太平洋からベーリング海のサケ・マス漁場研究と底魚資源研究」を続けていた。

しかし、終戦直前の昭和20年7月14～15日のグラマン艦載機空襲時に、青函連絡船の全船と海防艦が撃沈された折に、おしよ丸船長として函館山穴潤沖に練習船を避難させ、おしよ丸および練習生・乗組員一人の被害者をも出さなかった、水産学部の功労者であった恩師の斎藤市郎先生が、「昭和35年に諸般の事情で、北洋水産株式会社役員として、ベーリング海東部海域のフィッシュミール底引き母船錦洋丸船長」として転出された。そのため上野先生の指導で、調査船による漁場調査を条件に、故小藤英人先生とベーリング海東部海域の底魚漁場調査に参加した。北洋水産では調査船として、石川県宇出津水産高等学校練習船加能丸(服部保次郎船長：昭31エ)を備船し、漁場到着後母船から、武長進午君(昭26エ)と共に加能丸に転船して、ベーリング海東部海域における広範囲の漁場環境調査と、底引き網による底魚漁獲試験並びにフィッシュミールの主原料であったカレイ類の標識放流を行った。

それらの調査結果、カレイ類やスケトウダラを含めた底魚群

は、晩秋の10月から初春3月の冬期間には、ベーリング海大陸棚縁辺域の水深300～400m(水温0.5～1℃)層で越冬し、4～6月には産卵のため大陸棚上に形成される0℃から-2℃の冷水塊縁辺域南側の水深70～80m(0.5～2.0℃)に移動し産卵し、7～9月には大陸棚中央部に形成される冷水域を避けてプリストル湾内を、反時計回りに、大陸棚冷水塊北側のオキアミや權脚類が大量発生する海域にまで回遊して索餌期を送って栄養摂取し、9～10月には表面からの鉛直混合によって、0℃以下の陸棚底冷水域が消滅することによって、魚群が南下する年1回の反時計回り回遊をすること等を明らかにし、錦洋丸船団の漁獲量増大に貢献できた。

しかし、その後、反省課題も多かった。すなわち、戦後の食糧難が解消された昭和35年以降も、依然として我が国漁業が資源量を無視した漁獲増大を続け、昭和59年には遠洋漁業を中心に1,282万トンと、世界第一位を占める生産量を上げるまでに増大した。その過程でベーリング海東部海域の、フィッシュミールの主原料であったカレイ資源が、昭和33年から僅か5カ年間の乱獲によって、当初の主群であった6～10歳群が、5～7歳と若齢小型化し漁獲量も急速に減少した。

また、昭和35年に私共が加能丸で開発したプロビロフ諸島西方海域のホッコクアカエビ資源も母船式エビ底引き網漁船団によって僅か3年で壊滅した。

そのような状況を調査するために、昭和39年から48年まで水産庁漁業監督官を兼務して、底曳母船に乗船して底魚資源研究を続けたが、新規に開発されたベーリング海東部のスケトウダラ資源も、昭和38年当初は8万トンに過ぎなかったが、スケトウダラ・スリミ製法が北海道水産試験場の故西谷喬助技官(昭16後セ)や田中修技官(昭28セ)等によって開発され、昭和42年以降には洋上スリミ船団の増加によって50万トンの漁獲量までに急増し、昭和45年には大型スリミ・トロール船団の加入もあって120万トンに、さらに、昭和48年には168万トンに達した。

このような資源量を顧みない急激な乱獲によって、ベーリング海東部のスケトウダラCPUEの急減、産卵親魚群も当初の6～8歳群から3～4歳群に小型若齢化し、主産卵場における昼夜に亘る底引き漁船の過密操業によって、受精しない無精死亡卵が大量発生する等、カレイ資源と同様スケトウダラ資源も危機的状態に陥った。

このような過程を現場でつぶさに研究した結果を憂慮して、筆者は将来の資源管理の見地から、「スケトウダラ漁獲量を100万トン台に抑制し、ウニマック島北東部主産卵場の4～5月を禁漁区とする規制案」を提唱し、水産学会や大手水産会社、水産庁等に働き掛ける一方、NHKテレビ朝のスタジオ102で度々全国放送をして世論に訴えたが、一研究者としての無力さを痛感させられた。

その主因は、大手水産会社北洋部幹部は勿論のこと、水産庁の生産部長との交渉で研究資料を提示して説得したが、我が国では過去に漁獲量規制や産卵場規制等をした例がないとの理由で、にべもなく却下された。

寄稿

そのため、米国のアンカレッジやシアトルで開催された、日米加スケトウダラ資源の国際シンポジウムで、ベアリング海東部海域におけるスケトウダラ資源の危機的状況を訴え、その対策として「漁獲量100万トン、産卵場中心の産卵最盛期4~5月を禁漁区とする」ことを提案した。

これに対して、米国スケトウダラ研究者ケンドールDr.が質問され、後日の日米加3国漁業条約会議で、私の提案を全面的に取り揚げて、前述の提案通り決定されるという、我が国が独占的に利用していた資源が、外圧によって漸く規制されるという情けない経験をした。

その後の成果として、ベアリング海東部のスケトウダラ資源量が回復し、漁船のCPUE増加、産卵成魚群が増加して安定したスリミ船団経営が続いていた。

しかし、当時の日本を中心とした外国漁船団による自国沿岸域の資源乱獲を恐れた米国と旧ソビエトによる「200海里制度が昭和52年実施」に伴って完全に米国とソ連の規制下に入った。

このような大陸棚資源の管理制度は、昭和44年頃から国際的に論議され始めていた関係で、将来の規制が予測されるベアリング海東部の資源研究を続けても良いものかと考え、昭和46年より上野元一先生、故中村秀男先生(昭23ギ)らと共に、北海道噴火湾におけるスケトウダラ資源調査を始めたが、私にとっては長年のベアリング海東部の底魚資源研究は、その後の200海里制度実施後の、国内資源管理の貴重な体験となった。

噴火湾およびその周辺海域の研究は、北大水産学部研究調査船うしお丸I世(故坂口延二船長)を使用して、その後も旧漁場学講座の上野元一先生、高橋豊美先生(昭44エ)、中谷敏邦先生(昭52ギ)や学生・院生の協力を得て、スケトウダラ生態と資源調査を実施して、魚群の回遊機構を明らかにした。しかし、漁業の資源管理上重要な再生産初期減耗に大きく影響する、噴火湾内底層で越冬した大量のスケトウダラ0歳群(全長10~13cm)が、春先に表層に浮上して湾内沿岸の定置網で、大量に混獲され放棄される事態を重く受け止めて、当時函館水産試験場室蘭分場の林 清分場長(昭29ゾ)と噴火湾内漁協に働きかけて、定置網の6~7月の目合拡大による初期減耗防止に努めた。

一方、昭和30年以降20年間途絶えていた北海道松山沖合スケソウ延縄漁業の漁獲量が、昭和50年頃から回復して昭和57年に戦前の1.7万トンまで回復したが、その翌年から再び急減し始めたことから、昭和30~50年代の不漁時代に、家族で礼文・利尻方面へ厳冬中にムシロ掛け小屋で出稼ぎした苦難時代を恐れた松山郡大成町の漁業者が、松山支庁や函館水産試験場に原因究明を依頼したが、その経験不足と人材不足を理由に固辞され、私の研究室に2度にわたって30名ほどが大挙して資源調査を依頼され、函館水産試験場の要請もあって、止む無く引き受けざるを得なかった。

調査は、昭和58年12月から59年3月に高橋豊美先生(昭44エ)の協力を得て、厳寒の大時化の強風下を50トンの漁船に乗り込んで、魚探による魚群分布、漁場環境と卵稚仔調査をした結果、漁期間中に大成町沖合水温の鉛直変化が、沖合海

流の激変によって産卵群が移動することが大きな理由の一つであることが明らかになり、これを漁民に報告した。しかし、その後も資源減少が続き、昭和61年に6千トン台に低下したことから、松山スケソウ延縄協議会(桜井正和会長)から再度の要請を受けた。そのため、本格的な調査を漁場学講座教官・学生・大学院生と、乙部、熊石漁民等の協力を得て、漁場環境やスケトウダラ標識放流を実施すると同時に、平成元年から平成6年には、北大水産学部練習船「北星丸Ⅲ世(故小林源司船長:昭32エ;安間 元船長:昭38エ)による漁期前(10月)の来遊魚群調査」、「4月の漁期後に松山漁場から分散して索餌回遊する魚群調査を、おしよ丸Ⅳ世(増田紀義船長:昭25エ)」の協力を得て、日本海中央部の北海道武蔵堆沖合から新潟県沖合までの広範囲に亘って、魚探による魚群観察、漁場環境調査、中層トロール網による漁獲試験等を実施した。

それらの解析結果から、「松山沿岸で産卵する魚群は、北海道日本海北部の武蔵堆周辺で若齢期を過ぎて親魚となり、水深350~450m層、水温0.5~1.0℃の陸棚を離れた中層を南下して沖合から松山沿岸に接岸する。しかし、産卵後の成魚群は過去研究者の定説と大きく異なって北上する魚群はなく、南西方向に回遊して日本海沿岸を新潟県沖合から富山湾までと、日本海中央部の亜寒帯水域にまで広く分散して索餌期を送り、10~11月には水深350~450m層を再び松山沖合陸棚付近に回帰して、産卵期には産卵適水温2~3℃の150~200m層に浮上して産卵すること等」が明らかになった。

これらの成果を踏まえ、松山沖合スケトウダラ資源保護を考慮して、「乙部町相沼沖合の主産卵場を全面禁漁区とし、漁船数と延縄数を制限すると同時に、北海道海面漁業規則で規定されている11~3月漁期を、再生産に有効な産卵盛期の2~3月を禁漁期とし、操業期間を11~1月の3か月間に短縮する」よう松山スケソウ延縄協議会に提案し、異論も多かったが了承実施された。

その成果が、その後の資源回復に大きく寄与して漁獲量も順調に回復し、平成3年には戦後最大の1.8万トンの漁獲量を揚げた。これ等漁業者の漁獲規制の努力が認められ、平成9年に天皇・皇后両陛下御臨席の「全国豊かな海づくり大会」で松山スケソウ延縄協議会が、北海道を代表して表彰されている。

しかし、最近、北部日本海系スケトウダラ資源が、松山スケソウ延縄漁民の努力にも拘わらず、再び3~5千トンに急減する憂慮すべき状態にある。その原因の一つは温暖化の影響もあるだろうが、かつての主産卵場であった、武蔵堆周辺、雄冬沖、石狩湾沖、岩内湾沖等の産卵場が、漁船の乱獲によって壊滅状態にあり、唯一残存している松山沖合産卵場を考慮すると、武蔵堆周辺で初期生活期を送り、将来再生産に加入する1~3歳の幼稚魚群を大量に混獲している沖合底引き網漁船の規制をせざるを得ないであろう。そのためには、「幼稚魚群が多く生息している武蔵堆周辺の水深300m以浅域を禁漁区とする」ことが不可欠である。

TAC制度では「漁業の経営事情を勘案しつつも極力、生物学的許容漁獲量(ABC)を重視する」としているが、資源回復

のためには、水産庁と北海道の行政担当関係者はABCに重点を置いて、北海道機船漁業協同組合連合会と日本海沿岸漁業者との協議を重ねて、TAC対策を講じない限り北部日本海系スケトウダラ資源の回復は望めないであろう。

一方、昭和62年に噴火湾漁民からカレイ類資源の調査を要請され、その成果を漁業者に報告するよう依頼を受け、「うしお丸I世・II世(故松島寛治船長)による着底トロール網による漁獲試験と漁場環境並びにカレイ類の標識放流」を横山信一君(昭58ギ:現参議院議員)の研究を兼ねて実施して、漁況予測をすると同時に、度々漁業者と研究報告検討会を開催して、資源管理の重要性を訴え、同時に「噴火湾における底魚資源の漁海況情報」として、昭和62年以降最近まで38報に亘って報告してきた。

特に、噴火湾内底刺し網漁業の主対象資源である、アカガレイは標識放流の結果から、噴火湾内で漁獲される魚群は湾内で発生・生育し、湾外との交流が殆ど無いことから、漁獲量の変動は湾内の卓越年級群の多寡にもよるが、漁船の乱獲によって急減し続けたために、平成2年以降に噴火湾渡島・胆振海区の刺し網漁業者と、その対策会議が度々開催され、私の提案で「底刺し網漁船の削減と、予てから主張していた産卵盛期の1~2月のうち2月を全船禁漁」を実施した。

平成6年に至って、財団法人北水協会の支援を受けて、北海道水産林務部、渡島・胆振の海共第I号・第II号共同漁業権共有管理委員会、噴火湾カレイ刺し網協議会等で、アカガレイ資源管理が検討された。その際、更に若齢魚群保護を目的に、従来の「底刺し網の目合3.5寸目を3.8寸目とし、将来的には4.0寸目に拡大すること」を要請したが、底刺し網部会の強い抵抗で、3.7寸に設定されて今日に至っているが、3.5寸目から3.7寸目に刺し網目合拡大によって、従来漁獲物の平均年齢4歳が5歳になっている。森漁協の清水明販売部長(昭52ギ)によると、全長30cm以下の小型魚がアカガレイ全体の70%を占めているが、価格面では30cm以上の生産額が全体の70%を占めていることから、限られた湾内資源の有効活用の見地から、刺し網の目合を4寸目に拡大することを要請したい。

このような噴火湾内の底魚資源研究は過去の貴重な経験を生かした、厳しい資源管理に努めてきた成果で、今日のアカガレイ資源は卓越年級群の発生もあって大きく回復している。ただし、噴火湾内漁民の乱獲体質を考慮すると、今後の卓越年級群の発生如何では再び資源減少の可能性も危惧される状況にある。

とりわけ、ここで反省を込めて強調したい事は、我が国の政府や都道府県の行政関係者が資源管理にしても、漁場環境管理にしても、その管理意識が極めて低く、政府が平成13年6月に交付した水産基本法第13条に、「国は水産資源の適切な保存管理を図るため、最大持続生産量を実現することが出来る水準に資源を維持し、又は回復させることを旨として、漁獲量及び漁獲努力量の管理その他必要な施策を講ずる」と極めて高い理念を掲げながらも、第7条には、「国及び地方公共団体は、水産に関する施策を講ずるに当たって、水産事業者及び水産業に関する団体が、自主的な努力を支援することを旨とす

る」と規定して、漁業者任せの消極的なものである。

我が国漁業の現状をみると、漁業者が資源管理は愚か、収益よりも生産量追求に走る乱獲体質が依然として改まらず、水産庁や地方自治体あるいは地方漁業管理委員会も、単に漁業の一事的な紛争調整に努めるのみで、資源の実態を把握した規制対策を実施した例は少なく、水産基本法が何ら生かされていない。

これを平成23年の農林水産統計で見ると、平成13年の海面漁業・養殖業の総生産量613万トンが、平成22年には527万トンと10年間で14%減少しており、今日の我が国の漁業資源減少傾向は、依然として歯止めが掛っていない。

また、平成13年水産基本法第2条2項に、「水産資源の適切な保存及び管理を行うと共に、環境との調和に配慮しつつ、水産動植物の増殖及び養殖が推進されなければならない」としているが、現実の北海道噴火湾や青森県陸奥湾のホタテガイ養殖漁場では、養殖場施設で発生して海底に沈降堆積した有機物が、その分解過程で酸素を消費して、海底で酸欠現象がしばしば発生し、底魚資源にも大きな影響を及ぼしている。

近年の噴火湾におけるホタテガイ養殖場における大量斃死、ヨーロッパ・ザラボヤとイガイの異常発生等は、過去の漁場環境の汚染による影響と考えられ、行政の対策は一時凌ぎの対策に過ぎず、環境収容量を無視した過密大量養殖に対する根本的な対策に欠けているからである。

FAOは世界の海洋水産資源が「満限利用状態か過剰利用または枯渇状態の割合が増加している」と警告し、一方、国連では2040年の世界人口が90億人と、2010年に比べて30%増加して農産物のみならず、水産物の需要が今後も増大すると予想している。

水産庁は平成19年の「水産基本計画」および平成22年の「新成長戦略」に基づいて、「国民への水産物の安定供給の確保を図るため、適切な資源管理の安定をもとに実現する資源管理、漁業所償対策を始めとした施策を推進する」とうたっているが、都道府県行政者の自覚不足か、政府が笛吹けど踊らずで、漁業白書をみると世界有数の漁場を抱えながら、漁業者の意識調査では漁業資源が減少していると考える人が87.9%を占め、若者の後継者不足が続き漁業者の高齢化が進んでいる。

この現実を、関係行政者は資源や環境の実情を熟知している、各水産研究機関の現場研究者の意見を十分に汲み取った、きめ細かな資源管理や環境保全の政策を着実に実行されることを切に願うものである。

以上、筆者が長年漁場現場で調査研究した経験を実感して記述したもので、北水同窓会会員のご参考になればと願っています。

終わりに当たって漁場調査や研究に御協力を戴いた、多くの諸先輩や旧漁場学講座学生・院生並びに同窓生各位に対して衷心より厚くお礼申し上げますと共に、勤務当初からご指導を戴いた恩師の故齋藤市郎先生、並びに調査研究を支えて下さった上野元一先生、高橋豊美先生、中谷敏邦先生、高津哲也先生および故佐藤かの事務官に心から感謝申し上げます次第である。

寄稿

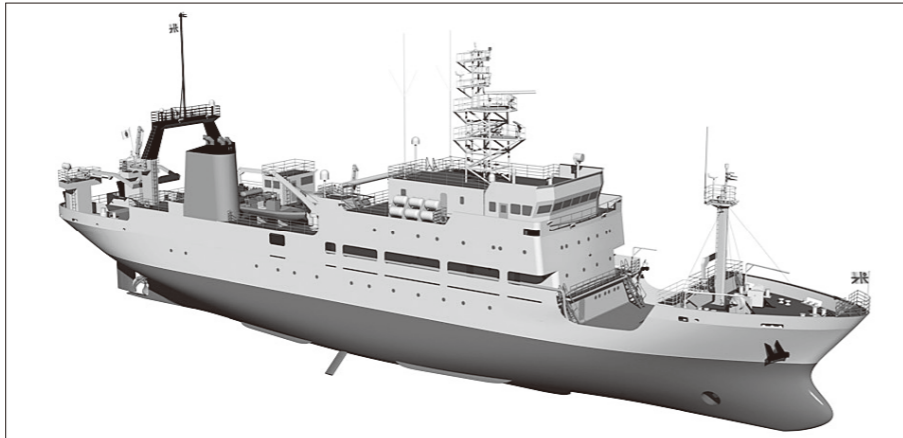
新おしよろ丸(平成26年竣工予定) 建造状況

木村暢夫(昭55ギ)

現在活躍している練習船おしよろ丸IV世は昭和58年に建造され(1983年竣工)、これまで約30年にわたり、亜寒帯系水域(北海道近海からベーリング海を含む北太平洋)を中心として、また北太平洋亜熱帯域やインド洋でも洋上実習を展開し、学部学生および特設専攻科(現在は廃止)の実習、大学院生の実験・実習、ならびに教員等の漁業・海洋に関する調査研究を担ってきた。また実習を通じて集積されたデータは公開されており、おしよろ丸のこれらの教育・社会貢献に対して、平成20年には第1回となるPICES AWARDが授与されている(北太平洋海洋科学機構)。新おしよろ丸はIV世とは異なり、主目的を海技免許状の取得から転換し、「世界の水産・海洋分野で活躍する人材の育成」、および「海洋生態系の保全と食資源の確保、持続可能な資源管理」といった現代の水産科学分野のニーズに対応出来る練習船として、平成24年度から代船建造が始まった。平成25年3月21日、起工式を岡山県玉野市の三井造船株式会社玉野事業所で行い(写真:おしよろ丸V世起工式)、平成26年には竣工予定である。新おしよろ丸の完成イメージ図から、船首尾楼間の特徴的なウエルデッキ(凹部)は、観測や実習の利便性にこだわった形状であり、従来のおしよろ丸(III世、IV世)の流れをくむが、船体形状は次世代を何うスマートな概観を有する。

建造に先立ち、高度な調査・観測能力を十分発揮する船体を確保するため、抵抗試験(写真:平水面抵抗試験、株式会社三井造船昭島研究所)、伴流試験、泡切れ性能試験等の模型実験やシミュレーションを実施し、優れた推進・操縦・耐航性能を有する船型を設計した。

新おしよろ丸は、全長約78m、幅約13m、深さ約5.8m、総ト



新おしよろ丸のイメージ図(三井造船株式会社)



模型実験(平水面抵抗試験、株式会社三井造船昭島研究所)

ン数約1,600トンで、定員は99名(うち学生は60名)、現在のおしよろ丸IV世(1,396トン)より船体は若干大きくなる。また、計量魚群探知機や海底地形探査装置など最新の水産資源・海洋計測機器を搭載し、高度で多様な教育・研究能力を備えるとともに、船体動揺を大幅に低減する格納型「フィンスタビライザー」を搭載し、実習の安全性や居住性を高めた。また、推進装置に電気推進を採用し、環境負荷低減にも配慮した練習船である。

(おしよろ丸代船建造小委員会委員長)

新おしよろ丸起工式

岡山県玉野市の三井造船株式会社玉野事業所、2013年3月21日

前列左から

筆者、嵯峨直恒水産学部長、佐伯 浩 総長、多田晴観財務部長、高津哲也練習船運営委員会委員長、後列左から

野崎裕貴船舶担当事務職員、山内貴敏船舶担当係長、三浦征則事務長補佐、高木省吾おしよろ丸船長、亀井佳彦うしお丸船長、高原周作財務部主計課予算管理担当主任



遠漁38年卒50周年記念会

安間 元(昭38エ)



写真 前列向かって左より
花村、大野夫人、大野、安間、安間夫人、佐藤
後列向かって左より
小笠原、松行、吉永、浪江、阿部、寺内

“来年卒業後50年になるが、この区切りで集まらないか”それまで数回仲間が上京した折りに5、6人集まって飲んでいましたが、平成24年秋の飲み会で小笠原君(小樽)から発議された。その場で安間(北斗)が世話人となって函館で50周年記念会を行うことになった。

昭和38年といえば、まだ沖合から遠洋への時代で大手水産会社が健在であり、海運会社からも求人があり、遠漁卒の仲間は次々と沖へ海外へ船出して行った。そのため同期会とは縁がなかった。少しずつ集まりはじめたのは皮肉にも水産業の撤退で東京組を中心に同窓会、祭事などの際顔を合わせるようになってからである。その中でいつも中心になってくれたのが、卒業以来東京に根を張っていた、卒業時、級長だった吉永君である。

遠漁といえば特専までいけば、授業時の他、在学中365日は乗船して共同生活をする。その上寮生活、各種クラブの繋がりを考えれば、お互いの親密度は半端ではない。幾ら離れていてもツーカーの仲である。

かくて、記念会は平成25年6月20日(木)湯の川温泉“湯の浜ホテル”で夫人2名を含め12名の参加で和やかに行われた。卒業時19名、物故者3名、所在不明者3名、不参加3名、参加10名が50周年の現状である。津軽海峡、函館山が眼前に見えるホテルを選んだのは学生時代から船の出入港には必ず通過した思い出深い場所であったからである。

会に先立ち物故者に黙祷、先ず、言い出しつべの小笠原君が挨拶、乾杯があった後、宴会に入り自己紹介から始まった、学生時代のことは予めおしよろ丸三世記念誌“揺籃”や北星丸記念誌などの投稿記事や当時の写真アルバム冊子を送っていたので省略し、卒後の経歴、現況など1人ひとり紹介された。さすがに水産、海運会社勤めの話となると、地球の裏側までの国名が飛び交い、文字通り世界を股に駆ける強者達の話であったが、健康の話では沈みがちになり、鹿児島から参

加した病み上がりの阿部君から“元気を出せ”と発破を掛けられる一幕もあった。また、年長堅物だった松行君(函館)の“オス”の一声も青春回帰に一役買った。公務員など地味な国内組では大野君(東京)が気象庁の船舶で長年船の安全と、気象業務の遂行のため勲功に値するとして、平成24年秋の叙勲で、「瑞宝小授章」を受けたことが紹介され拍手歓声で祝福した。中で異色なのがA食品会社で頭角を現し、ベトナム進出の先駆けでテレビ出演もあった浪江君(大阪)である。我々の間でも“ナニワの芸人”と言われ学生時代から宴会ではVIPであったが、商才にもその才能と船と寮の共同生活が活かされたと感じたい。勿論この宴会でも年相応の替え歌を用意して率先して、幹事の間をもってくれた。水産放浪歌、都ぞ弥生を謳歌したあと、級長吉永君がメド。その後2次会では一室に集まり話の続きで談笑。アクション豊かな薩摩なまりとラス、成田仕込みのフランス語が布団をはさんで飛び交ったのが、市井の外交官の片鱗を残していた。会直前腰痛で来られなかった西村君(仙台)が居ればまた別な雰囲気になったと残念でならない。寄る年に酒の量は確実に落ちていたが、その分おしゃべりは健在であった。翌日朝食後、機会ある毎に連絡し合いできる限りお互いに会おうと約して解散。有志5人は当時とは変貌した母校見学。木村暢夫教授にご案内を頂きました。この場をお借りして感謝申し上げます。記念会前後天候も味方してくれ、何よりの北海道土産となった楽しい50周年記念会でした。

第58期、59期、60期(昭和43～45年卒) 遠洋漁業学科合同同期会の報告

高橋 豊美(昭44エ)



写真 前列左より
内藤義和、松浦光紀、藤井尋志、深井尚武、佐藤勝美、河原武則、大野 孝、清水八州男、菊川哲行、秋山高明
後列左より
片山雅嗣、重田親司、高橋豊美、水野隆夫、富樫康明、山口 皓、西村清治、木嶋武郎、浜野義治、藤井真一、吉川圭一、山下明則

5月19日、遠くは沖縄、関西など各地から3期に亘る元遠漁生22名が「ラビスタ函館ベイ」に集まった。今回の合同同期会は、4年前の同期会で木嶋武郎君(45卒)が提案し、

クラス会
報告

佐藤勝美君(44卒)が清水八州男さん(43卒)に呼びかけて実現した。主に39年と40年の入学者が対象だが、諸般の事情により3期合同となった。既にみな還暦をはるかに超えて古希に手が届く年齢になっており、卒業以来会っていない場合は、互いに変わり果てた風貌に絶句する場面もあった。

佐藤君の司会により開会し、初めにこれまでに亡くなられた学科の先生方ならびに練習船の船長と士官、そして先に逝った7名の同期生のご冥福を祈って黙祷を捧げた。

河原武則さんが幹事を代表してご挨拶をされ、次いで清水さんの乾杯の音頭で懇親会が始まった。松浦光紀君の軽妙な進行の下、出席者各人の近況がそれぞれ披露された。スクリーンには深井尚武さんが用意された懐かしい学生時代の写真が映し出され、大野 孝さんが説明を加えられた。最後に、学生時代と変わらぬ吉川圭一さんによる迫力満点の前口上に続いて、「都ぞ弥生」を全員でスクラムを組んで声高らかに歌い、いったん閉会した。

二次会もほぼ全員が大門の居酒屋に繰り出し、当時学生バンドのボーカルを担当していた重田親司君と松浦君、カラオケの先生に習っているという菊川哲行さんがそれぞれ自慢の喉を披露し、大いに喝采を浴びた。夜も更けて別れを惜しみながら、一部の三次会メンバーを残し、再会を誓って別れた。

終わりに、本同期会の準備にご苦労された、河原さん、清水さん、佐藤君、内藤君、松浦君に深謝するとともに、第58～60期の遠漁生全員のご健勝を心より祈って、会の報告といたします。

北水柔道部、昭和38～昭和42年入学
第一回「漁火会」開催報告

吉田 康祐(昭44化)



写真 後列:左から安村、後藤、伊藤、阿部
前列:左から吉田、町野、川島、高橋、中山、橋本

「そろそろ同窓会やろうか。」始まりは昨年8月、函館で同窓飯野氏の経営する居酒屋で、一杯やりながらの一言でした。この日久しぶりに函館に集った北水柔道部同窓(小城、伊藤、吉田、三浦)の面々にて、何はともあれまずは一歩踏み出し年次の近い者どうして旗揚げしようかと決定いたしました。札幌在住の伊藤、吉田が幹事となり、まず昭和38年から昭和42年入学北水柔道部の最新連絡先確定からスタート致しました。ほとんど一線からしりぞかれ、悠々自適の同窓が多かっ

たですが、まだまだ最前線で活躍されている仲間も多く、久しぶりに懐かしい声を聞くことができました。同窓各位のご協力を頂き、20名の最新連絡先名簿が春先には確定いたしました。第一回でもあり、又季節のもっとも爽やかな時期にと、札幌にて6月23日実施となりました。当日初夏の緑濃き札幌に集ったのは懐かしき10名の面々!(嬉しい事に、本学柔道部OBの阿部、川島両氏が漁火会趣旨に賛同しこの日に会わせ駆けつけてくれました。)

定刻18時30分を待たずして、早くも会場である「魚や一丁」には往年の勇猛男子!が続々と集まり、あちこちで感激の握手と抱擁が。皆、頭髪薄くなり、白髪しわ増えれども、気持ちは紅顔の美青年であった函館時代に戻っての感激の対面となりました。

式はまず、ご逝去された恩師河野先生、同窓阿部氏の黙祷よりスタートしました。

久しぶりに我らの魂の唄「水産放浪歌」を腹の底から歌い、橋本様の開会のご挨拶、中山様の乾杯の音頭にて懇談へと入りました。初めは老境に入ったジエントルマン?でありましたが、そこはかつて松風町大門でならした猛者ぞろい!たちまち持ち込みの泡盛一升瓶もがんと、昔に戻っての交流となりました。寮で夜中毎晩オスでたたき起こされたこと、つらかった練習その後の飯の美味かった事、何と七重浜から函館山山頂まで走った事等語り尽きせぬ宴となりました。

充分酔いが回った頃、いよいよ本日のハイライト!幹事にて同窓から集約し作成し、本日受付で渡した「近況報告パンフレット」(我らのアナログ年代にふさわしく手書きで集約)をもとにして、各人無制限にて近況報告となりました。大半はすでに一線を退き晴耕雨読の面影ですが、厳しさの中に温かい眼差しで我々を育てて頂いた恩師河野先生への思い、激動の高度成長時代の苦労話の数々、家族を守ってきた気概、そして激動の半世紀を乗り越えてきた苦労話に皆しみり!それでも孫の話、カーチャンののろけ話、そして学生時代の武勇伝に大笑いの、まことに楽しいひと時でした。共通して話されていたのは、やはり健康の大切さ。皆何かしら持病を抱え、今後の節制精進?を語っておりました。残念ながら諸事情により今回欠席された同窓よりの熱いメッセージは心熱く代読されました。勇躍青年海外協力隊で現在フィジー島で活躍の三浦氏!世界を舞台に水産学の真髄を極める小城氏、函館で居酒屋を経営居酒屋兆治として男道を貫く飯野氏、長く水族館館長として青少年を啓蒙された伊藤氏、そして残念ながら体調をくずされ、また諸事情により今回欠席された同窓に、次回こそと出席一同熱いエールを送りました。

宴も大詰め、幹事伊藤氏が苦労されて取り込んだPCに学生時代の写真の数々のスライドショーの開催となりました。今や好好爺の面々も、あの熱い時代に戻り画面に食い入るように見つめ、「俺こんなに汚い道着着てたのか!」「いやまだ髪まっ黒ふさふさだ!」「あすこの店覚えてる!」「真冬の寒稽古

にふるえてるな!」「酒ばかり食らってるな!」と半世紀前のご対面ににんまり!

時間のたつのはあっという間!語っても尽きぬ我ら柔道部同窓でしたが、最後に今後の「漁火会」について意見交換を行い、①来年再び函館に集結する事、②各学年幹事を置きさらに広める事、③ここまで苦労をともにされた奥様の参加も広げる事等、この会の継続に大賛成の嬉しいご意見が続々!幹事伊藤、吉田は立ち上げの苦労のしがいがあったと嬉し涙の一幕でありました。

名残惜しく、最後は「都ぞ弥生」の肩を組んでの斉唱で閉会としました。(せっかくだと三番までに挑戦!皆よく覚えてましたが、やはり最後の三番は若干不慣れ!次回の宿題となりました。)

*「漁火会」は、広く旧交を温める暖かい交流の場といたく、今回たまたま入学年次の近い者で立ち上げましたが、年次問わず北水柔道部の先輩、同窓の皆様、さらに趣旨にご理解頂ける北水、北大同窓皆様のご参加をお待ちしております。幹事伊藤、吉田までご一報ください。

*「漁火会」名称の由来は、柔道部合宿時朝4時に起き、七重浜から洞爺丸慰霊碑まで走り、到着した海べから見えた哀愁溢れる松風町の赤い灯、青い灯、そして暗い海辺にただよう漁火が忘れられず、青春の想いでとしてつけたしだいです。

平成25年度 北水会 隠岐支部会

三橋 正孝(昭53ギ)



本年5月29日、久々の北水会隠岐支部会を開催いたしました。

隠岐の島町出身力士隠岐の海が大活躍する大相撲を横目に、嘗ては二桁を数えた北水会隠岐支部会も現在島内在住者数名という少し寂しい状況にあります。

この日参加者は昭18セ・松長信男氏(前列左)、昭20ゾ・阿山多喜也氏(前列右)、昭53ギ・三橋正孝(後列右)、昭56ギ・村上一(後列左)、の4名でした。

会は3時間ほどの夕食会でしたが、戦中戦後の激動期を経てこられた大先輩お二人の奮闘記に華を咲かせ当時の水産生の気概に触れることが出来た実に楽しいひとときでした。

若年の?2名がビールなどを傾けている中で、90歳を過

ぎた松長先輩は1人日本酒3合を空け最後まで毅然と場を取り仕切っておられたのには(さすが陸軍中尉殿!!と)感服いたしました。

阿山氏も戦後、隠岐の島にて真珠の養殖業にて良質の真珠で大成功をされ、一時は御木本パールからも買い付けに来られたという功労者でした。

さらに、イタヤガイその他島根県における養殖業の第一人者として県水産界にその多大な足跡を残されながらも、惜しまれつつ、家庭の事情から和歌山県串本に転居される事となりました。

今後のご健康をお祈りいたします。

我ら北水男児、「時化の後には風が来る」、「漂えど沈まず」、「不撓不屈」、「円未だ閉じず!」

の心意気にて・・・。(後列左よりの座右の銘)

平成24年度
北水同窓会小樽支部総会の報告

幹事長 平山 聡(昭54ギ)



前列右より

川島孝省(昭38セ) 山本貞夫(昭46化) 東 廣(昭29ギ)
藤田征晴(昭31ゾ) 高山裕斌(昭36ゾ)

2列目右より

村松裕史(昭54食) 磯谷揚一(昭49ゾ) 斎藤博行(昭47化)
大田道代(平3ゾ) 桜庭啓恭(昭46ギ) 山本十三(平3ギ)
長谷川智人(平10食) 嘉山雄大(平24海)

3列目右より

平山 聡(昭54ギ) 堀井亜希(平9食) 片桐保昭(平2ギ)
大野 肇(昭55ギ) 小笠原惇六(昭38エ) 小田一夫(昭45ギ)
小野寺正裕(昭59ギ)

4列目右より

原 圭(平24資) 藤本崇人(平19生) 三宅教平(平16生)
大滝豊志(平元ギ) 多胡 勇(平12シ) 安達泰之(平11海)
鎌田和幸(昭58化) 五十嵐映児(昭48化)

記録的な積雪にめげることなく、2月15日「日本橋」において例年通りに小樽支部総会が行われました。最初に昨年亡くなられた勝木茂氏(昭31ギ)に黙祷をささげ、議事終了後懇親会となりました。今年度は例年になく28名という多数の方々に参加していただき、皆さん賑やかに時間を過ごしていたようでした。来年も多数の皆様の参加を期待しています。

書評

「人体探求の歴史」

笹山 雄一（昭44ゾ）著
築地書館

私は昭和44年増殖学科卒業（第59期生）の笹山雄一と申します。大学院水産学研究科へ進学致しましたが、博士課程1年目で中途退学し、富山大学へ奉職致しました。その後、金沢大学へ移動し、研究・教育生活を40年続け、昨年の3月をもって定年退職を致しました。この度、その間に行った授業を『人体探求の歴史』として築地書館より上梓致しましたので（新書版より一回り大きいサイズで定価2400円プラス税、7月2日発売）、『親潮』誌上を借りてご紹介させていただきます。

まず、内容の基盤は、体の器官や臓器：眼、松果体、耳、鼻、心臓、血液、骨、肝臓、腎臓、睪臓、肺、消化管、肛門、精巣、卵巣は、“なぜ日本語でそう呼ぶのか”、“英語の語源ではどうか”など〈言葉〉にこだわっています。次に横糸として、それらの器官や臓器の〈機能の発見の歴史と現在の医療（iPS細胞を含む）〉で紡ぎ、縦糸としてそれらを貫く〈進化〉で編み上げております。全篇に、生物・医学に関わる人物評伝やセレンディピティー（serendipity）などを含むエピソードが満載であります。

本のキャッチコピーは、「ひらめき、ちょっとした偶然、抑えきれない探求心、地道な実験・研究、燃え尽きる使命感……。私たちの体の仕組みが解明されるまでには、古今東西の医師や科学者たちの悲喜こもごもがあった！そして人体への探求は現在も続く。最新の研究成果とともに、人の体とその解明



の道のりを明らかにする一冊」であります。現在、「築地書館ウェブサイトに」と「アマゾン：人体探求の歴史」に目次が載っております。

皆様、ぜひ一冊ご購入の上、読んで頂ければ幸甚に存じます。どうぞ、よろしくお願い致します。

□学位取得者【平成25年3月取得】

齋藤 類	Spatial and temporal changes in the zooplankton community around the Aleutian Islands (アリリューシアン列島周辺海域における動物プランクトン群集の時空間変動)
中尾征生	直接数値シミュレーションによる船体および搭載物の流体力特性の研究
福田美亮	ツノナシオキアミ <i>Euphausia pacifica</i> の広帯域音響散乱特性に関する研究
HEFFRY VEIBERT DIEN	Study on boat characteristics and safety of small purse seine fishery in North Sulawesi, Indonesia (北スラウェシ(インドネシア)における小型旋網漁船の特徴と操業安全性)
松野孝平	Spatial and temporal changes in plankton community in the western Arctic Ocean (西部北極海におけるプランクトン群集の時空間変動に関する研究)
山中智之	Taxonomy and systematics of a stichaeid fish, <i>Ernogrammus zhirimuskii</i> , and its related fishes (Cottiformes: Stichaeidae) (タウエガジ科魚類ヤリガジ及びその近縁群の系統分類学的研究)
菅野 岳	魚類トリプシンの構造・機能解析およびその環境適応に関する研究

周 賀	Genetic studies on polyploid variations of sturgeon species and hybrids (チョウザメ類とその雑種の倍数性変異に関する遺伝学的研究)
趙 岩	Studies on spermatozoa of polyploid, hybrid and clonal <i>Misgurnus loaches</i> (倍数体、雑種およびクローンドジョウの精子に関する研究)
対馬忠広	水産副次産物由来モノアシルリン脂質の安定性と機能性に関する研究
THITIMA JANTAKOSON	Characteristic denaturation of myosin and actin in whiteleg shrimp (<i>Litopenaeus vannamei</i>) abdominal muscle upon heating and freezing (タイ国産エビの加熱、凍結によるミオシンとアクチンの特徴的な変性)
西川 翔	フコキサンチンによる骨格筋での代謝制御を介した血糖改善効果に関する研究
MOHAMMAD MATIUR RAHMAN	Characterization of PL-14 alginate lyases from some gastropod marine mollusca and their structure-function analyses (腹足類PL-14型アルギン酸リアーゼの性状と構造・機能関連解析)
ヤン ホン ウエイ	Studies on involvement of gonadotropic hormones and their receptors on sex differentiation in Nile tilapia, <i>Oreochromis niloticus</i> (ナイルティラピアにおける生殖腺刺激ホルモンの性分化への関与に関する研究)
リュウ ヨン ウン	Studies on mechanism of lipid droplet formation in oocytes of a salmonid, cutthroat trout, <i>Oncorhynchus clarki</i> (サケ科魚類カットスロートトラウトの卵母細胞における油球形成機構に関する研究)

□平成24年度 卒業生(学部)・修了者(修士・博士)の就職先一覧

アオハタ(株)／青森県産業技術センター水産総合研究所／秋山興業(株)／アサヒ飲料(株)／旭川市内高校／アサヒビール(株)／味の素(株) ADEKA クリーンエイド(株)／イオンリテール(株)／岩手県庁／岩見沢市役所／上野製菓(株)／ENEOS グローブ(株)／愛媛大学／大塚製菓(株) 岡三証券(株)／花王(株)／カゴメ(株)／兼松(株)／協同飼料(株)／釧路市役所／グローブライド(株)／航空自衛隊／こうのとりクリニック 甲陽化学工業(株)／国立極地研究所／佐川急便(株)／札幌アポロ石油(株)／滋賀県庁／JA 愛知厚生連／JA 全農ミートフーズ(株) JA 西日本くみあい飼料(株)／水産総合研究センター／水産庁／住商ファーマインターナショナル(株)／砂川市役所／西濃運輸(株) 全国漁業共同組合連合会／全国農業協同組合連合会／大正製薬(株)／高田香料(株)／田辺三菱製薬(株)／東興興業(株)／東京化成工業(株) 東京大学大気海洋研／東京都水産試験場／東京都千代田区／東洋水産(株)／豊田通商(株)／奈良県立高取国際高等学校 新潟県庁水面水産試験場／ニチレイロジステック／日清食品ホールディングス(株)／日清丸紅飼料(株)／日本水産(株) 日本政策金融公庫農林水産事業／日本罐詰(株)／日本食品分析センター／日本甜菜製糖(株)／日本郵船(株)／ネスレ日本(株) ノキアシーメンスネットワークス(株)／野村證券(株)／函館市役所／羽幌高等学校／東日本旅客鉄道(株)／備前化成(株)／美瑛市役所 広島県立神辺旭高等学校／富士通エフ・アイ・ピー(株)／伏見蒲鉾(株)／プライフーズ(株)／古野電気(株)／ホクレン農業協同組合連合会 北海道教育大学／北海道漁業共済組合／北海道漁業協同組合／北海道警察／北海道大学水産・海洋コーディネーター養成事務局 北海道大学水産科学研究院／北海道庁／北海道バイオマスリサーチ(株)／北海道ファインケミカル(株)／北海道文教大学 北海道立総合研究機構／北海道労働金庫／丸大食品(株)／ミサワホーム北海道(株)／三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)／宮崎精鋼(株) ヤフー(株)／ヤマサ醤油(株)／ユーザーサイド(株)／雪印メグミルク(株)／ユニバーサル造船(株)／理研ビタミン(株)／六花亭製菓(株)／和歌山県庁 (株)あさくま／(株)ウェザーニューズ／(株)オービック／(株)北の達人コーポレーション／(株)キミカ／(株)クリニコ／(株)高研／(株)サイバーリンクス (株)三光マーケティングフーズ／(株)C I J ネット／(株)シー・エス・シー／(株)シーボン／(株)シジシージャパン／(株)セイコーマート／(株)ダイナム (株)ニチレイ・ロジグループ本社／(株)ニトリ／(株)野田塾／(株)野村総合研究所／(株)ハイテック／(株)万城食品／(株)ピクルスコーポレーション札幌 (株)二葉屋／(株)ブリヂストン／(株)ペイロール／(株)マクロミル／(株)マルハニチロ北日本／(株)マルハニチロホールディングス (株)ミツカングループ本社／(株)ミットヨ／(株)モンベル／(株)ユーズ／(株)ロッククライミング調査のきいすとん／(有)大田原農場 Bangladesh Agricultural University／Sam Ratulangi University／Thailand Songkhla Rajabhat University

□会員異動

○平成25年3月31日付

吉水 守 水産科学研究院特任教授が任期満了のため退職
 帰山 雅秀 水産科学研究院教授が任期満了のため退職
 岡本純一郎 水産科学研究院教授が水産庁資源管理部付に転出
 山口 秀一 水産学部准教授が定年のため退職

○平成25年4月1日付

板橋 豊 水産科学研究院前教授が同特任教授に採用
 岸 道郎 水産科学研究院前教授が同特任教授に採用
 水田 浩之 水産科学研究院准教授が教授に昇任

会員死亡通知

鈴木 翼 (特別会員)	平成25年 1月27日	学内より
村上 幸雄 (昭12ヨ)	平成23年10月19日	ご家族様より
池谷 博啓 (昭13ギ)	平成23年 3月 2日	静岡県支部様より
斉藤 基弥 (昭13ギ)	平成24年11月	ご家族様より
上野 元一 (昭16ギ)	平成25年 6月16日	高橋豊美(昭44エ)様より
横山 富夫 (昭16セ)	平成25年 5月19日	ご家族様より
荒井 慎三 (昭17セ)	平成25年 2月19日	ご家族様より
矢嶋 宏治 (昭17セ)		農学部同窓会名簿より
近藤 正人 (昭20ギ)	平成25年 1月18日	ご家族様より
二本柳 五郎 (昭20セ)	平成24年10月15日	ご家族様より
小野澤 悟 (昭22ギ)	平成24年 2月 5日	ご家族様より
阿部 新三郎 (昭23ギ)	平成25年 6月 6日	小島伊織(昭23ギ)様より
裏田 敏夫 (昭23ゾ)	平成25年 2月11日	ご家族様より
水沢 六郎 (昭23ゾ)	平成25年 4月26日	荻野喜夫(昭31ゾ)様より
石田 敬康 (昭24ギ)	平成24年12月31日	ご家族様より
田中 傳四郎 (昭24ギ)	平成25年 6月25日	ご家族様より
安住 幸彦 (昭24エ)	平成25年 2月 5日	今野宗郎(昭24エ)様より
三浦 国彦 (昭24セ)	平成24年 2月14日	ご家族様より
弦巻 孝弘 (昭25ギ)	平成25年 3月 4日	ご家族様より
星 敏雄 (昭25ギ)	平成24年12月 6日	ご家族様より
佐藤 紀三男 (昭26ギ)	平成24年 1月 4日	ご家族様より
宮永 榮一 (昭26ギ)	平成25年 2月 8日	ご家族様より
荻原 神一郎 (昭26エ)	平成23年 4月 2日	ご家族様より
北村 力 (昭26教セ)	平成25年 2月 6日	穴澤邦雄(昭26セ)様より
松田 清貞 (昭26教ゾ)	平成24年11月14日	川端昭治(昭26ゾ)様より
丸山 恵敬 (昭26教ゾ)	平成24年11月13日	川端昭治(昭26ゾ)様より
村瀬 怜三 (昭28ギ)	平成24年 2月24日	ご家族様より
神原 勇 (昭28エ)	平成24年 5月	手島邦明(昭28エ)様より
荒木 貴三郎 (昭29エ)	平成24年 8月 8日	坂本有隣(昭29エ)様より
長谷 博人 (昭29セ)	平成24年 4月25日	ご家族様より
小野 亮平 (昭31エ)	平成25年 4月 2日	吉野秀男(昭31エ)様より
佐藤 弘之 (昭31セ)	平成24年 9月16日	増田昌介(昭31セ)様より
川本 明弘 (昭33セ)	平成25年 4月29日	松井 彪(昭36ゾ)様より
七田 康弘 (昭34セ)	平成25年 4月29日	山本道也(昭34ゾ)様より
高石 信 (昭35エ)	平成24年10月14日	ご家族様より
田中 隆 (昭35セ)	平成24年10月16日	ご家族様より
次田 練次郎 (昭36ギ)	平成24年10月23日	ご家族様より
池田 均 (昭38ゾ)	平成24年10月 9日	ご家族様より
金田 紘三 (昭40ギ)	平成25年 3月22日	坂本浩輔(昭39エ)様より
柳町 治光 (昭45化)	平成25年 3月29日	静岡県支部様より
山田 哲 (昭45食)	平成24年 5月16日	ご家族様より
駒木 一成 (昭48ギ)	平成25年 2月 2日	奈良岡修一(昭47ギ)様より
高津 敏 (昭49ギ)	平成25年 5月30日	品川高儀(昭49化)様より
高橋 慎一 (昭50ギ)	平成21年11月末頃	静岡県支部様より
星野 啓一 (昭50ギ)	平成25年 3月25日	ご家族様より
榎本 仁郎 (昭50食)	詳細不明	

親潮投稿規定

【寄稿、支部・会員便り、会員の受賞、ご案内など】

一つの投稿につきA4版・1ページ(2000字程度)までとする。この制限以上の長文あるいは連載を希望される場合は2号分までとする。写真を入れる場合、その分の文字数が減る。また写真はホームページに掲載することもできる。原稿は、同窓会宛に封書で郵送するか、同窓会のメール宛に送付することとする。

【同窓生の声】

同窓会誌に対する意見、感想などについての投稿とする。個人的な連絡は掲載しない。一つの原稿につき300字までとする。同窓会宛のメール(hokusui@hotmail.or.jp)のみ受け付ける。写真は入れられない。

【編集後記】

平成25年度「親潮」第1号(通算301号)をお届けします。

毎年秋に開催されることとなった「北海道大学ホームカミングデー」は、今年は札幌キャンパスのほか、別日程で函館キャンパスでも実施されます。函館では同窓の皆様への研究室の公開、講演会、会場を移しての懇親会が予定されています。また、札幌では北水同窓生による寄席と懇親会が行われます。本号の巻頭にはこれらのご案内を2ページに亘り掲載しました。皆様にはぜひお気軽にご参加いただければと思います。

特集「北水の今」では研究についての話題1題を取り上げました。筆者である三谷曜子先生は北大北方生物圏フィールド科学センターの教員として函館キャンパスで研究と教育をされており、特集では海洋哺乳類に関する研究を紹介していただきました。

本年度第2号は通算302号目の親潮になります。原稿の締め切りは、平成26年1月10日(必着)とさせていただきます。寄稿につきましては、郵送もしくは電子メール(hokusui@hotmail.or.jp)にて受付をしております。支部報告や同期会報告、著書の紹介など、皆様ふるってご投稿くださいますようお願い申し上げます。詳しくは上欄の投稿規定をご参照ください。

(編集幹事/安藤靖浩 昭63化)

食中毒検査なら信頼と実績の中山薬品商会へ 一検体@1,000円~承ります。

NAKAYAMA MEDICINES CO. LTD



株式会社 中山薬品商会

代表取締役 中山 一郎

本社 ☎040-0075 函館市万代町20番10号 PHONE(0138)40-6275・FAX40-3939
 釧路営業所 ☎084-0903 釧路市昭和町2丁目15番地3 PHONE(0154)52-4101・FAX52-4103
 札幌出張所 ☎065-0031 札幌市北3条東19丁目6番14号 PHONE(011)299-5493・FAX299-5493

<http://nakayamayakuhin.jp>

いま豊かな食生活。
見直しましょう魚のある暮らし。

青森市中央卸売市場

中水

青森中央水産株式会社

代表取締役社長 石川 栄一

〒030-0183 青森市卸町1番1号

鮮魚部 TEL 017(738)1281

冷凍部 TEL 017(738)8221

塩干部 TEL 017(738)5511

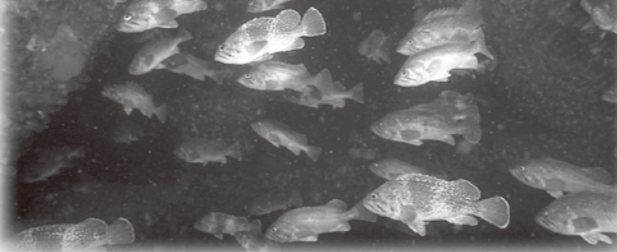
加工部 TEL 017(738)6581

企画部 TEL 017(738)1281

管理部 TEL 017(738)1181

ホームページ <http://www.aochuu.co.jp>

F.P.魚礁に集まるツイ類



オクトムに入礁するミズダコ
側近を遊泳するタヌキマバル



海洋土木株式会社

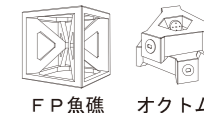
本社 東京都中央区銀座3-9-11

TEL : 03-3544-5511 <http://www.kaiyodoboku.com>

代表取締役 木實谷浩史(54ゾ)
 取締役札幌支店長 佐々木洋(53ギ)
 札幌支店部長 村井和明(59ゾ)

取締役副社長 石井直志(49ゾ)
 参 与 川真田憲治(48修増)
 技術部次長 日和久典(平6ギ)

取締役相談役 鉢木和三(38ゾ)
 青森営業所長 山口伸治(49化)



玉倉竹田

食卓に函館の味を



株式会社 竹田食品

代表取締役 竹田 寿広

本 社 工 場 函館市浅野町3番10号
 TEL(0138)43-1110(代) FAX(0138)43-1113

札 幌 営 業 所 札幌市中央区北13条西19丁目1番1号(水産保冷配送センター3F)
 TEL(011)623-0990 FAX(011)644-9910

竹田食品販売(株) 東京都中央区築地7丁目5番3号(紀文第一ビル2階)
 TEL(03)6226-6820 FAX(03)3545-2135

竹田食品販売(株) 仙台営業所 宮城県仙台市青葉区本町2丁目9番8号(日宝ビル5階3号室)
 TEL(022)772-1970 FAX(022)722-1987

竹田食品販売(株) 大阪営業所 大阪府大阪市淀川西中島4丁目3番5号(NLCセントラルビル5階)
 TEL(06)6307-5311 FAX(06)6307-5358



交通事故、労働災害、医療過誤、倒産、債務整理、サラ金破産
個人再生、未払い残業代請求、離婚、相続、遺言、成年後見

相談料は全て無料です

吉原法律事務所

札幌弁護士会 弁護士 吉原美智世
(昭和48年増殖学科卒業)

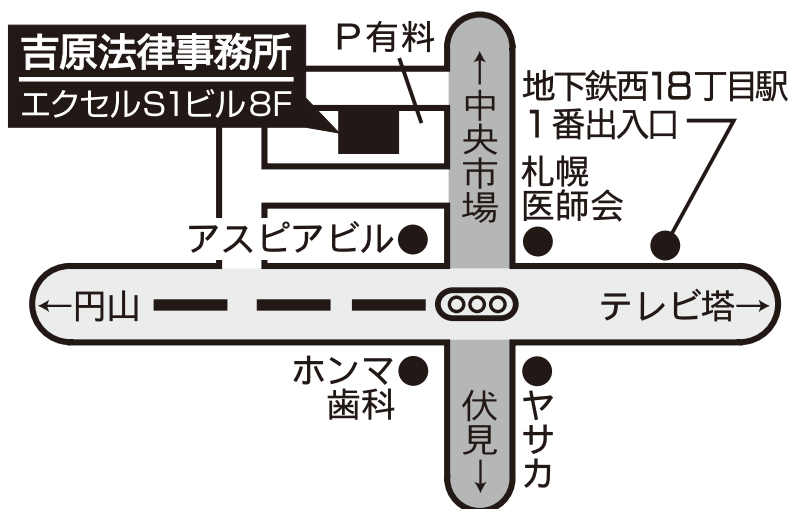
お気軽にお問い合わせ下さい

TEL 622-7963 FAX 622-8414

札幌市中央区大通西20丁目2-20(エクセルS1ビル8F)

(交通) 東西線西18丁目地下鉄1番出口

(E-mail) lawyer@yoshihara-lawoffice.jp



営業時間においでになれない方はご相談下さい。